HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | ゲルマン語形容詞変化の歴史的発達（1）：ゴート語、ドイツ語、北ゲルマン語 |
| Author(s) | 清水, 誠 |
| Citation | 北海道大学文学研究科紀要, 155, 1（左）-54（左） |
| Issue Date | 2018-07-31 |
| DOI | https://doi.org/10.14943/bgsl.155.l1 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/71275 |
| Type | departmental bulletin paper |
| File Information | 155_01_shimizu.pdf |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学研究科紀要 155 （2018）

# ゲルマン語形容詞変化の歴史的発達（1）
## ── ゴート語，ドイツ語，北ゲルマン語 ──

清　水　　誠

On the Historical Development of Adjectival Inflection in the Germanic Languages (1) — Gothic, German and North Germanic —
(*The Annual Report on Cultural Science* No. 155. Graduate School of Letters, Hokkaido University. Sapporo/Japan. 2018. ISSN 1346-0277)

SHIMIZU, Makoto
(mshimizu@let.hokudai.ac.jp)

## 1．はじめに[1]

本稿は，ゲルマン祖語で発達したと推定される形容詞強・弱変化の体系が

[1] 本稿は拙稿（2012c）の不備をその後の研究成果によって全面的に補い，資料的・方法論的に根本的に見直して別稿としたものである。末尾に拙稿（2012c）の誤植を記す。略語は次のとおり。ア：アイスランド語，アフ：アフリカーンス語，イ：イディッシュ語，印欧：印欧祖語，ヴェ：デンマーク語ヴェンシュセル方言，英：英語，オ：オランダ語，ギ：(古典)ギリシャ語，ゲ：ゲルマン祖語，ゴ：ゴート語，古英：古英語，古高ド：古高ドイツ語，古ザ：古ザクセン語，古ノ：古ノルド語，ス：スウェーデン語，ザ：(西)低地ドイツ語北低地ザクセン方言，チュ：スイスドイツ語チューリヒ方言，中高ド：中高ドイツ語，デ：デンマーク語，ド：ドイツ語，西フ：西フリジア語，ニュ：ノルウェー語ニューノシュク，ブ：ノルウェー語ブークモール，フェ：フェーロー語，フラ：フランス語，ベ：スイスドイツ語ベルン方言，ボ：スイスドイツ語ボスコ・グリン方言，メ：(東)低地ドイツ語メクレンブルク・フォーアポマーン方言，ラ：ラテン語，ル：ルクセンブルク語，ロ：ロシア語

10.14943/bgsl.155.l1

文献に残された古ゲルマン諸語の時代以降，現代のゲルマン諸語（および方言）に至るまでに生じた一連の変遷についての論考である。

ゲルマン語の形容詞は，名詞派生接尾辞の「n-語幹」を起源とする弱変化を発達させた点で，他の印欧語とは異なる特徴を備えるに至った。n-語幹の持つ「個別化」の機能は「限定」の意味に通じ，ゲルマン祖語の形容詞弱変化は名詞句に「定」（英 definite）の意味を付与して，「不定」（英 indefinite）の意味を表す形容詞強変化と相対するようになった。しかし，指示代名詞から定冠詞が発達するにつれて，形容詞弱変化形による定の意味は薄れていった。以下では，まず，文献以前の時代の推定によるこのプロセスを略述する。次に，その後の歴史的発達について，弱変化を特徴づける語末音 n の脱落，同形の語尾を重ねる「平行表示」（第 6 節参照）と同形語尾の重複を回避する「階層表示」（第 6 節参照），強・弱変化の区別の保持と消失，語尾の保持と消失，名詞句のまとまりをマークする「シンタグマ表示」（第 6 節参照）の観点から論述する。扱う対象はゴート語，ドイツ語，北ゲルマン語，そして，ドイツ語以外の西ゲルマン語および方言の順に拡大し，類型論的に位置づけていく。最後に，最近の「文法化」（英 grammaticalization）をめぐる研究動向との関連から「外適応」（英 exaptation），「脱文法化」（英 degrammaticalization）の概念も援用して，以上の結果に理論的考察を施す。

前半部分にあたる今回は，扱う範囲を強・弱変化の形成過程の略述とゴート語，ドイツ語，北ゲルマン語の考察までとする。

## 2．形容詞の強変化と弱変化―ドイツ語を例に

印欧語の形容詞は名詞と同一の語形変化（英 declension）の範疇に属し，「強変化」（英 strong declension）を示す。一方，「弱変化」（英 weak declension）はゲルマン語独自の革新であり，ギリシャ語，ラテン語，サンスクリットなど他の語派の古語には見られない[2]。現代ゲルマン諸語には，程度の差

[2] バルト・スラヴ語の形容詞にも，非限定的意味を持つ短形（英 short form）と代名詞的

はあるが，形容詞に強・弱変化の 2 通りの語形変化を保っているものが多い。ドイツ語の例を見てみよう（ド gut-（英 *good*），定冠詞 d-，不定冠詞 ein-）。

| 強変化 | | 良いワイン（男性） | 良いミルク（女性） | 良いビール（中性） |
|---|---|---|---|---|
| 単数 | 主格 | gut***er*** Wein | gut***e*** Milch | gut***es*** Bier |
| | 対格 | gut***en*** Wein | gut***e*** Milch | gut***es*** Bier |
| | 与格 | gut***em*** Wein | gut***er*** Milch | gut***em*** Bier |
| | 属格 | gut***en*** Wein***(e)s***[3] | gut***er*** Milch | gut***en*** Bier***(e)s*** |
| | | 良い男（男性） | 良い女（女性） | 良い子供（中性） |
| 複数 | 主格 | gut***e*** Männer | gut***e*** Frauen | gut***e*** Kinder |
| | 対格 | gut***e*** Männer | gut***e*** Frauen | gut***e*** Kinder |
| | 与格 | gut***en*** Männern | gut***en*** Frauen | gut***en*** Kindern |
| | 属格 | gut***er*** Männer | gut***er*** Frauen | gut***er*** Kinder |
| 弱変化 | | その良い男（男性） | その良い女（女性） | その良い子供（中性） |
| 単数 | 主格 | d***er*** gut***e*** Mann | d***ie*** gut***e*** Frau | d***as*** gut***e*** Kind |
| | 対格 | d***en*** gut***en*** Mann | d***ie*** gut***e*** Frau | d***as*** gut***e*** Kind |
| | 与格 | d***em*** gut***en*** Mann | d***er*** gut***en*** Frau | d***em*** gut***en*** Kind |
| | 属格 | d***es*** gut***en*** Mann(e)s | d***er*** gut***en*** Frau | d***es*** gut***en*** Kind(e)s |
| 複数 | 主格 | d***ie*** gut***en*** Männer | d***ie*** gut***en*** Frauen | d***ie*** gut***en*** Kinder |
| | 対格 | d***ie*** gut***en*** Männer | d***ie*** gut***en*** Frauen | d***ie*** gut***en*** Kinder |
| | 与格 | d***en*** gut***en*** Männern | d***en*** gut***en*** Frauen | d***en*** gut***en*** Kindern |
| | 属格 | d***er*** gut***en*** Männer | d***er*** gut***en*** Frauen | d***er*** gut***en*** Kinder |

形容詞強変化は，第 3 節で述べるように，印欧祖語で支配的だった「名詞

---

要素（印欧 **yo*）を付加した限定的意味を持つ長形（英 long form）の区別があるが，その由来はゲルマン語の強・弱変化とは異なるとされている（Ramat 1981: 96，千種 1983: 53–55，Jasanoff 1994: 269）。

[3] 下線をつけた男・中性単数属格 gut***en*** Wein***(e)s***/Bier***(e)s*** の -en は，弱変化語尾の混入を示す（第 6 節参照）。

変化」に代わってゲルマン祖語の時代に広がった「代名詞変化」に由来し，限定用法（英 attributive use）では主として無冠詞，つまり限定詞を欠く場合に用いる[4]。ドイツ語では，形容詞の強変化語尾は限定詞の語尾（＝代名詞変化）と共通である。たとえば，男性名詞単数与格 gut***em*** Wein では，形容詞 gut***em*** は d***em*** Wein の定冠詞 d***em*** と同じ語尾 -em を伴う。ただし，指示代名詞に由来し，d- を語幹とする 1 音節（＝単音節）の定冠詞に対して，形容詞強変化は多音節（＝ 2 音節以上）になる。そのため，無アクセント音節の語尾母音があいまい母音（英 schwa）の e [ə] に弱化し（ド d-***as*** [as] Bier＞gut-***es*** [əs] Bier, d-***ie*** [iː] Milch＞gut-***e*** [ə] Milch），-er [ɛɐ̯] では弱化した -e-（[ɛ] ＞）[ə] が母音化した -r [ɐ̯]（＞ [ɐ]）の直前で脱落する[5]（ド d-***er*** [ɛɐ̯] Wein＞gut-***er*** [əɐ̯]＞[ɐ] Wein）。

ドイツ語の形容詞強変化語尾はまた，不定の意味の限定詞で欠けている一部の語尾を補い，性・数・格の文法的形態表示（以下，「形態表示」）を行う（男性単数主格，中性単数主・対格：ド ein-***Ø*** gut***er*** Mann, ein-***Ø*** gut***es*** Kind, 英 *a good man, a good child*）。ただし，性・数・格の中で，数の形態表示は名詞の語形変化に負うところも大きい。このように，ドイツ語の形容詞変化は，後述するアフリカーンス語を除くゲルマン諸語と同様に，名詞の形態と限定詞の有無およびその種類という形態統語論的条件に依存している。従来の「名詞句」（NP，英 noun phrase）に代わって「限定詞句」（DP，英 determiner phrase）という用語を用い，限定詞（英 determiner）を主要部とする最大投射とみなす理由のひとつはこの点にある。dem Wein が有アクセントの指示代名詞 dem「それ」で代用できることも，別の理由になる[6]。ただし，本稿で

---

[4] 下線をつけた男・中性単数属格 gut***en*** Wein***(e)s***/Bier***(e)s*** の弱変化形語尾 -en を除く。

[5] 無アクセントの -er がそのまま [ɐ] に母音化するという説明は，厳密には正しくない。

[6] 限定詞句（DP）の設定は，Greenberg（1963）を契機に展開された言語類型論の扱いとは異なる結果を生むことがある。たとえば，印欧語を特徴づける統語構造を類型論的に考察した Comrie（1998: 92）は，一致（英 agreement）のタイプを主要部表示（英 head-marking）と従属部表示（英 dependent-marking）に分類した Nichols（1986）に従って，主語と述語の一致（英 subject-predicate agreement）を印欧語で「唯一の主要部表示の例」（'the only instance of head-marking'）としている（ド der Mann（＝従属部）komm***t***

は古語と現代語を扱うことを考慮して，従来通りの「名詞句」とする。

一方，弱変化は主として名詞句が定の意味を表す限定詞を伴う場合に用いる。ドイツ語には定冠詞（男性単数主格 d***er***）のほかに，指示代名詞（dies***er***（英 *this*），jen***er***（英 *that*），welch***er***（英 *which*）など[7]）がある。ただし，jed***er***（英 *each, every*），all***er***（英 *all*），manch***er***（英 *many (a), some*）などの不定代名詞は，かならずしも定の意味を表すわけではないが，語形変化ではこのグループに属するようになっている。ドイツ語の弱変化語尾は -e［ə］/-en［ən］の 2 種類に限られ，形態表示にほとんど寄与していない。語尾 -e は男性単数主格と女・中性単数主・対格に限られ，その他はすべて語尾 -en となる。

## 3．ゲルマン語形容詞弱変化の起源と発達―ゴート語を例に

この節では，ゲルマン語の形容詞が印欧祖語以来の強変化に加えて，新たに弱変化を文法化した推定過程について説明しよう。同じくゲルマン祖語の時代に文法化された歯音接尾辞（英 dental suffix）による弱変化動詞（英 weak verb）と用語的には重なるが，これとは別に，名詞類（英 nominal）の弱変化は古くは固有の文法的意味を持ち，現代ゲルマン諸語とは異なる役割を担っていた[8]。名詞類の弱変化は本来，子音 n によって特徴づけられていたが，これは「個別化」（英 individualization）の意味を表す名詞派生接尾辞による「n-語幹」（英 *n*-stem）に由来する。n-語幹名詞のグループには，ラテン語の Catō「カトー」（属格 Catō***n***is），ギリシャ語の Agáthō***n***「アガトーン」，Strábō***n***「ストラボーン」，Plátō***n***「プラトーン」などの固有名詞（男名）も属しており，印欧祖語の接尾辞 *-on（＞ゲ *-an＞ド -en）を伴っていた。この

（＝主要部），英 *the man comes*）。しかし，名詞句を限定詞句ととらえ直せば，これは誤りであることになる。なぜなら，d***er***（＝従属部）Mann（＝主要部）という名詞句を定冠詞 der を主要部とする限定詞句（d***er***（＝主要部）Mann（＝従属部））と解釈し直せば，ここでも主要部表示の例が観察されるからである。

[7] 代名詞の語形は便宜的に男性単数主格形（語尾 -er）で示す。

[8] この節の説明には，清水（2012b: 92–99）と内容的に重複する部分がある。

4 例は形容詞 catus「賢い」，agathós「良い」，strabós「斜視の」，platús「（肩幅の）広い」の派生名詞で，「賢さ・善良さ・斜視・（肩幅の）広さという性質の個別的実現」に近い意味を表す。このように，n-語幹は個別化した対象を表す名詞を派生する語形成手段として機能していた。個別化は唯一性・内在性の意味に通じ，「限定」（英 definiteness）の意味を表すに至った。

ゲルマン祖語は，個々の語にかかわる語形成（英 word formation）の手段だった n-語幹を語形変化（＝屈折，英 inflection）の範疇に転用し，名詞と同じ語形変化に属する形容詞の弱変化に組み込んだ。その段階は以下で示すが，ドイツ語の形容詞弱変化が定冠詞に類する限定詞と共起するのは，このためである。ドイツ語の形容詞弱変化語尾 -e/-en は男性単数主格と女・中性単数主・対格で -n を欠くが（第 2 節の変化表参照），ゲルマン祖語では一律に -n を伴っていたとされている（第 8 節参照）。

ここで，歴史言語学的に見た語形成と語形変化の関係について補説しておこう。古くは印欧語の名詞は，意味的中核である「語根」（英 root，例：古英 stān-/古高ドstein-，英 *stone*）に，「性」（＝文法性，英 gender）とは異なるが，これとゆるかに対応する「語幹形成要素」（英 thematic element，古英/古高ド -a-）が加わって，「語幹」（英 stem，古英 stān-***ɑ***/古高ド stein-***ɑ***）を形成し，これが文法的役割を示す「語尾」（英 ending，古英 -s/古高ド -Ø[9]（＜-s））を伴っていた（古英 stān-***ɑ-s***（＞英 *stones*）/古高ド stein-***ɑ-Ø***（＞ド *Steine*））。語幹の種類には，語幹形成要素の種類に応じて，多数派で「幹母音型」（英 thematic）の母音語幹と少数派で「非幹母音型」（英 athematic）の子音語幹があった。個々の名詞は特定の語幹と性を有していたが，形容詞には自由にどの性にも転じる能力（ド Motionsfähigkeit）があり，同一の形容詞が性に応じて異なる語幹を備えていた。ゲルマン語の形容詞は男性と中性で「a-語幹」，女性で「ō-語幹」という主要な母音語幹（半母音 j/w を伴う「ja-/wa-語幹」，「jō-/wō-語幹」を含む）に大幅に移行しており，ゴート語でも「i-語幹」と「u-語幹」の形容詞は少ない。形容詞の語形変化では，これが後述する「名

[9] -Ø はゼロ語尾または要素を欠くことを示し，必要に応じて用いる。

詞変化」として残り，「代名詞変化」が侵入した部分を除いた強変化の語形に現れる。

一方，子音語幹名詞の中で語例が比較的多かったのが「n-語幹」である。ラテン語では，男性 homō「人」，中性 nōme***n***「名前」，女性 nātiō「民族，国」などがその例にあたる。ラテン語では中性名詞が単数主格でも -n を保ったが，男・女性名詞では失われ，単数与格 homi***n***ī，単数対格 nātiō***n***em のように，残りの斜格形で -n- が保たれた。オランダ語の natie や西フリジア語の naasje は主格形（ラ nātiō），英語の natio***n*** やドイツ語の Natio***n*** は斜格形（ラ nātiō***n***-）を継承したフランス語からの借用である。ドイツ語を始めとして，名詞の複数形がいくつかの語尾やウムラウトの有無を伴って数種類に分かれるのは，本来の語尾が失われ，かつての語幹形成要素が再解釈によって複数形標識へと文法化された結果である。英語では ox***en***（←ox），childr***en***（←child）など少数例にとどまるかつての n-語幹は，オランダ語（sten***en*** [sté·nə(n)]←steen [ste·n]，英 *stones*←*stone*）や西フリジア語（stjinn***en*** [stjínən]←stien [stiən]，同左）では，大多数の名詞に用いる主要な複数形語尾 -en（オ [ə(n)]/西フ [ən]）に発達した。これは，語形成の範疇だった n-語幹が特定の名詞の枠を超えて文法化され，語形変化の範疇に拡張したことを示している。n-語幹の語形変化への侵入は，ゲルマン祖語の段階で接尾辞 *-an（＜印欧 *-on）（＞ド-en）に由来する形容詞弱変化として，組織的に実現されていたのである。

n-語幹名詞の例として，ゴート語の hana「雄鶏」（ド *Hahn* ＜ゲ *han***an***-，男性「an-語幹」），haírtō「心臓」（英 *heart*＜ゲ *hert***an***-，中性「an-語幹」），tuggō「舌」（英 *tongue*＜ゲ *tung***ōn***-，女性「ōn-語幹」[10]）の変化を形容詞 blinds「盲目の」の弱変化と比べてみよう。両者はまったく等しいことがわかる。

[10] 弱変化女性名詞には「īn-語幹」（ゴ manag***ei***「多数，群衆」，ド *Menge*＜ゲ *manag***īn***-）もあり，ゴート語に典型的に例証されるが，これは比較級（ゴ batiz***ei***，英 *better*）と現在分詞（ゴ nimand***ei***，ド *nehmend*/英 *taking*）の女性形に転用された。形容詞弱変化女性形に転用されたのは ōn-語幹である。

| 弱変化 | | 男性（an-語幹） | 女性（ōn-語幹） | 中性（an-語幹） |
|---|---|---|---|---|
| 単数 | 主格 | blind***a***—han***a*** | blind***ō***—tugg***ō*** | blind***ō***—haírt***ō*** |
| | 対格 | blind***an***—han***an*** | blind***ōn***—tugg***ōn*** | blind***ō***—haírt***ō*** |
| | 与格 | blind***in***—han***in*** | blind***ōn***—tugg***ōn*** | blind***in***—haírt***in*** |
| | 属格 | blind***ins***—han***ins*** | blind***ōns***—tugg***ōns*** | blind***ins***—haírt***ins*** |
| 複数 | 主格 | blind***ans***—han***ans*** | blind***ōns***—tugg***ōns*** | blind***ōna***—haírt***ōna*** |
| | 対格 | blind***ans***—han***ans*** | blind***ōns***—tugg***ōns*** | blind***ōna***—haírt***ōna*** |
| | 与格 | blind***am***—han***am*** | blind***ōm***—tugg***ōm*** | blind***am***—haírt***am*** |
| | 属格 | blind***anē***—han***anē*** | blind***ōnō***—tugg***ōnō*** | blind***anē***—haírt***anē*** |

n-語幹はゲルマン祖語以前から男・女・中[11] の 3 性の名詞に語例があり，語形変化への拡張に適していたと考えられる。n-語幹は最初に多数派の a-語幹の形容詞に拡張し，類推によって ō-語幹やその他の形容詞にも及び，語形変化として文法化されたと推定されている（Harðarson[12] 2017: 922）。

ゲルマン語形容詞の母音語幹と n-語幹による語形変化は，次に述べる段階を経て，強変化と弱変化の二重組織に体系化されていったと推定されている。まず，弱変化の登場以前は，母音語幹の名詞変化と共通の強変化しかなかった。ただし，同じ名詞類でも，名詞に由来する「名詞変化」（英 nominal declension）と代名詞に由来する「代名詞変化」（英 pronominal declension）は微妙に異なっていた。第 2 節の変化表からわかるように，ドイツ語の形容詞

[11] 印欧語では元来，女性は中性複数からの後代の発達であり，ゲルマン語では名詞語幹の種類にも男性と中性との間に共通点が多い。現代ドイツ語でも，男性と中性の語形変化は女性に比べて類似している。ただし，後述するように，大陸北ゲルマン語，オランダ語，西フリジア語などでは男性と中性が両性（英 common gender）に融合し，両性・中性の 2 性組織に移行している。そこで，本稿の変化表では「男・女・中」の順序で示すことにする。

[12] 大多数のアイスランド人の人名には姓がなく，Harðarson は「ヘルズル（ア Hörður）の息子」という意味の父称（英 patronymic）である。アイスランド語としては Jón Axel（2017: 922）として引用するのが適切だが，アイスランド語圏以外での慣例に従って Harðarson（2017: 922）とする。他のアイスランド人の人名についても同様。

強変化は指示代名詞から発達した定冠詞の変化とほぼ一致しており（ド d***er*** Wein（英 *the wine*）—gut***er*** Wein（英 *good wine*））, かつての名詞変化は失われ, ほとんど代名詞変化に移行している。この傾向は初期の古ゲルマン諸語で顕著だった。ゴート語の強変化名詞 dags「日」（英 *day*）, waúrd「語」（英 *word*）, giba「贈り物」（英 *gift*）と指示代名詞 sa（男性）/þō（女性）/þata（中性）「それ」の語形変化を比べてみよう。強変化には代名詞変化（斜体字下線つき）が大幅に混入しており, 中性単数主・対格には, 名詞変化に由来するゼロ語尾形（-Ø）と代名詞変化に由来する有語尾形（-ata）がある[13]。

| 強変化 | | 男性（a-語幹） | 女性（ō-語幹） | 中性（a-語幹） |
|---|---|---|---|---|
| 単数 | 主格 | blind***s***—dag***s*** | blind***a***—gib***a*** | blind-***Ø***—waúrd-***Ø*** |
| | | | | *blind**ata**—**þata*** |
| | 対格 | blind***ana***—***þana*** | blind***a***—gib***a*** | blind-***Ø***—waúrd-***Ø*** |
| | | | | *blind**ata**—**þata*** |
| | 与格 | *blind**amma**—**þamma*** | blind***ai***—gib***ai*** | *blind**amma**—**þamma*** |
| | 属格 | blind***is***—dag***is*** | *blind**aizōs**—**þizōs*** | blind***is***—waúrd***is*** |
| 複数 | 主格 | *blind**ai**—**þai*** | blind***ōs***—gib***ōs*** | blind***a***—waúrd***a*** |
| | 対格 | blind***ans***—dag***ans*** | blind***ōs***—gib***ōs*** | blind***a***—waúrd***a*** |
| | 与格 | *blind**aim**—**þaim*** | *blind**aim**—**þaim*** | *blind**aim**—**þaim*** |
| | 属格 | *blind**aizē**—**þizē*** | *blind**aizō**—**þizō*** | *blind**aizē**—**þizē*** |

この変化表は, 形容詞の語形変化が「名詞変化＞代名詞変化」のように移行したことを示している。こうして形容詞の強変化は, 本来の名詞変化に新

[13] 付表１にあるように, 強変化中性単数主・対格については, 古高ドイツ語（blint-***Ø***/blint***az***）ではゴート語（blind-***Ø***/blind***ata***）と同様にゼロ語尾の名詞変化と有語尾の代名詞変化が併存し, 古英語（blind-***Ø***）と古ザクセン語（blind-***Ø***）はゼロ語尾の名詞変化のみ, 古ノルド語（blin***t***＜blin***d-t***）は有語尾の代名詞変化のみとなる。古高ドイツ語では, 男・女性についても, 強変化主格でゼロ語尾の名詞変化と有語尾の代名詞変化が併存している（男性 blint-***Ø***/blint***ēr***, 女性 blint-***Ø***/blint***iu***）。

興の代名詞変化が大幅に加わった語形変化へと発達した。この発達は，定・不定という限定の意味と密接に結びついていた。ゴート語の男性単数与格形を援用して，古典的な推定のプロセスを紹介しよう（Meillet 1949[7]: 183）。

まず，n-語幹に由来する弱変化の登場以前は，3 人称代名詞自体と同様に，代名詞変化にも指示機能があったと推定されている。詳細は割愛するが，代名詞変化は，不定の意味をもつ短語尾形とも呼ぶべき名詞変化に，定の意味を担う要素が付加した長語尾形に由来するとも推定されている（千種 1983: 55f.）（Ⅰ）。

Ⅰ　不定：形容詞強変化・名詞変化（短語尾形）　*blind***a**「ある盲目の男に」（＝名詞　dag***a**「ある日に」）
↔　定：形容詞強変化・代名詞変化（長語尾形）　*blind***amma**「その盲目の男に」（＝指示代名詞　þ***amma**「それに」）

代名詞変化の限定の意味は早い時期に希薄になったと推定され，指示代名詞を形容詞強変化形に付加して限定の意味を補強するようになった（Ⅱ）。

Ⅱ　不定：形容詞強変化・名詞変化　*blind***a**「ある盲目の男に」
↔　定：指示代名詞＋形容詞強変化・代名詞変化　*þ***amma** blind***amma**「その盲目の男に」

指示代名詞が付加された形容詞強変化・代名詞変化は，冗長な同一語尾（-amma）が重複してすわりが悪く[14]，限定の意味を持つ n-語幹を用いて弱変化（-in）として置き換えたと考えられる。不定の意味の形容詞強変化では名詞変化（-a）がすたれ，代名詞変化（-amma）に移行した（Ⅲ）。

[14] Meillet（1949[7]: 183）によるこの説明（"... et un groupe tel que got. *þamma blindamma*《à cet aveugle》aurait quelque chose de choquant"）へのリトアニア語の例に基づく反論については，Bammesberger（1990: 230）参照。

Ⅲ　不定：形容詞強変化・代名詞変化　blind***amma***「ある盲目の男に」
↔　定：指示代名詞（＞定冠詞）＋形容詞弱変化　þ***amma*** blind***in***「その盲目の男に」

その後，指示代名詞が定冠詞に発達する過程で弱変化は限定の意味を失い，「無冠詞＋形容詞強変化（＋名詞）」と「{ 指示代名詞/定冠詞 } ＋形容詞弱変化（＋名詞）」のパターンに一般化された。

ゲルマン祖語に定冠詞は存在せず，初期の古語でも未確立だった（Ramat 1981: 85ff.）。ゲルマン語の定冠詞は 2 種類の指示代名詞から生じたとされている（①ゴ sa（男性）/sō（女性）/þata（中性），古英 sē/sēo/þæt，古ノ sá/sú/þat＜ゲ *s-/*þa-＜印欧 *so-/*to-; ②古ノ -inn/-in/-it＜ゲ *jai-na-＜印欧 *-eno-; Prokosch 1939: 273f., Jasanoff 1994: 268）。両者は直示的（英 deictic）な機能を弱めてアクセントを失い，現在ではユトラント半島中央部を境に，南西側のデンマーク語西ユトラント方言（デ vestjysk）と西ゲルマン語全体では前置定冠詞（英 preposed definite article，定冠詞＋名詞），北東側のその他の北ゲルマン語では後置定冠詞（英 postposed definite article，名詞＋定冠詞）として分布している（清水 1995：60–62，2012a: 98）。ゲルマン語では，不定冠詞は定冠詞に比べて発達時期が遅い。たとえばドイツ語では，概略的に言って，定冠詞は古高ドイツ語（ド Althochdeutsch 750〜1050），不定冠詞は中高ドイツ語（ド Mittelhochdeutsch 1050〜1350）の時代に成立したとされるが（Szczepaniak 2011[2]: 104），その使用は義務的ではなく，現在の使用状態に達するのは中高ドイツ語末期と言われている（Hill 2013: 112–113）。現在でも，定冠詞はすべてのゲルマン諸語に見られるが，不定冠詞はアイスランド語で未発達である。

注意を要するのは，ゲルマン祖語の動詞が印欧祖語のアスペクト組織を「現在↔過去」という時制組織に組み替えた点である。スラブ語などの高度に文法化された「完了体↔不完了体」のアスペクト組織は，出来事の時間的な定（ロ napisat'「書いてしまう（完了体）」）と不定（ロ pisat'「書いている（不完了体）」）の区別とも言える。出来事自体にせよ，出来事の関与者にせよ，情

報伝達の効率性から見て，定・不定の区別はどこかで明示する必要性が高い。ゲルマン語は，出来事自体の時間的な限定表現である動詞のアスペクトの消失を補うように，出来事の関与者である名詞句で定・不定の区別を表示するために，定冠詞に先駆けて形容詞強変化の代名詞変化，ついで形容詞弱変化を発達させた可能性もある[15]。

上記のゲルマン語形容詞強・弱変化の推定による発達過程に照らして，ゴート語聖書から具体例を検討してみよう。

① 指示代名詞＋強変化

ゴ þanuh gasaihƀands Iudas ***sa galēwjands*** ina þatei du stauai gataúhans warþ
then seeing Judas 指代-男-単-主 betraying-現分-男-単-主-強 him that (he) to judgement lead was
そのとき，イエスを裏切ったユダ（＝裏切り者のユダ）は（イエスが）罪に定められたのを見て（Matthew 27, 3）

gōlja izwis ik Taírtius ***sa mēljands*** þō aípistaúlein in fraujin
greet you-複 I Tertius 指代-男-単-主 writing-現分-男-単-主-強 指代 letter in Lord
この手紙を筆記した私テルテオは，主にあってあなたがたにあいさつの言葉を送る（Romans 16, 22）

② 指示代名詞＋弱変化

ゴ ik im hlaifs ***sa libanda***, sa us himina qumana
I am bread 指代-男-単-主 living-現分-男-単-主-弱 指代 from heaven come-過分
私は天から下ってきた生きたパンである（John 6, 51）

③ Ø＋弱変化

ゴ iþ ansts gudis ***libains aiweinō*** in Xristau Iēsu, fraujin unsaramma

[15] Leiss（2000）では同様の考え方がくわしく展開されている。

but free-gift of-God life-女-単-主 eternal-女-単-主-弱 in Christ Jesus lord our
しかし，神の賜物は私たちの主イエス・キリストにおける永遠の命である（Romans 6, 23）

ゴ saei galaubeiþ du mis aih ***libain aiweinōn***
who believes to(= in) me has life-女-単-対 eternal-女-単-対-弱
私を信じる者は永遠の命を持っている（John 6, 47）

① sa galēwjand***s***「裏切っている者（＝裏切り者）」（galēwjan「裏切る」），① sa mēljand***s***「書いている者」（mēljan「書く」），② sa liband***a***「生きているもの」（liban「生きる」）の 3 例は，ともに指示代名詞の男性単数主格形 sa と動詞の形容詞形である現在分詞　① galēwjand***s***/mēljand***s***，② liband***a*** からなる。しかし，上記の変化表の男性単数主格 blind***s***（強変化）↔ blind***a***（弱変化）「盲目の」からわかるように，①と②は意味に応じて語形変化が異なっている。② sa liband***a*** は，「生きているパン」という内在的で固有の性質としての限定の意味を弱変化（-a）で表している。一方，① sa galēwjand***s*** と① sa mēljand***s*** は，「裏切る」/「手紙を書く」という一時的で限定されない行為を表すので，指示代名詞と共起しても例外的に強変化（-s）を用いていると解釈できる。ゴート語の現在分詞は弱変化するのが一般的だが，①の強変化（-s）を示す 2 例は指示代名詞を伴いながらも，本来の「定：弱変化」に対して「不定：強変化」という意味を反映させた例と考えられる（千種 1983: 60f.）[16]。

一方，③ libains aiwein***ō***/libain aiwein***ōn***「永遠の命」の aiwein***ō***/aiwein***ōn***「永遠の」は女性単数主・対格の弱変化（上記の変化表の女性単数主/対格 blind***a***/blind***a***（強変化）↔blind***ō***/blind***ōn***（弱変化）参照）であり，類例も多いが，指示代名詞を伴っていない。この aiwein***ō***/aiwein***ōn*** は不定の環境にありながら，内在的で固有の性質としての「永遠の」という限定の意味を弱

[16] ただし，現在分詞の男性単数主格語尾 -s は強変化ではなく，かつての「nd-語幹」の残存とみなす意見もある（Braune/Heidermanns 2004[20]: 122）。

変化だけで表していると考えられる[17]。このように，ゴート語にはⅠ＞Ⅱ＞Ⅲの発達過程の途中段階を反映する例が見られる。

## 4．形容詞弱変化と個別化・限定の意味の残存―同格表現との関連

現代ゲルマン語にも，形容詞の弱変化に限定の意味の残存が観察される例がある。まず，アイスランド語では，固有名詞の修飾句に定冠詞をつけずに形容詞弱変化を用いる。このとき，通常の「形容詞＋名詞」の語順による gaml***i*** Páll「老パウトル（＝老いたパウトル）」（gamal***l*** ＜*gamal-***r***「老いた」）と並んで，「名詞＋形容詞」の語順による Páll gaml***i*** という表現が多い（Kress 1982: 179，第 9 節の変化表参照）。これは，弱変化が限定の意味で名詞派生の機能を担っていたことを示唆している。古ノルド語でも，Ólafr helg***e*** (helg***i***)[18]「聖オーラヴル（＝聖なるオーラヴル）」のように，定冠詞を伴わずに強変化形 helg***r***「聖なる」の弱変化形 helg***e*** (helg***i***) が現れる（男性単数主格，古ノ -e (-i)＝ア -i，付表 1，2 参照）。さらに，Ólafs saga helg***a***『聖オーラヴルのサガ』では，属格形 Ólafs helg***a***「聖オーラヴルの」が分離して，helg***a***「聖なる」が名詞 saga「サガ」の後ろに置かれている。helg***e*** (helg***i***)/helg***a*** は形容詞の名詞化「聖なる者」で，Ólafr/Ólafs「オーラヴル」と同格（英 apposition）の「オーラヴル，すなわち聖なる者」の意味とも解釈できる（Meillet 1949[7]: 184，Harðarson 2017: 922）。

同様に，ドイツ語では wir Arm***en***「私たち貧者」（arm「貧しい」），ihr

[17] 古英語期 700 年頃の『ベーオウルフ』（*Beowulf*）でも，指示代名詞・定冠詞を欠く「形容詞弱変化＋名詞」の例は少なくない。古高ドイツ語と古ザクセン語ではこの用法は衰退しており，主として「神」への修飾句に限られる（Dal/Eroms 2014[4]: 68）。

[18] 古ノルド語の形容詞弱変化については，付表 2 参照。古ノルド語では，無アクセント音節の母音 -i と並んでしばしば -e が現れる。現代アイスランド語では -i に統一されて，Ólafur helg***i*** となる。注 48 参照。なお，第 8 節で述べるように，北ゲルマン語では一律に語末音 n の脱落が起こっている。

lieb***en*** Freunde!「君たち，親愛なる友らよ」（lieb「親愛な」），Nur einen Sommer gönnt, ihr Gewaltig***en***!「ただ一度の夏を恵んでくれ，おんみら強力な者たちよ」（gewaltig「強力な」，Hölderlin）のように，限定された対象を指す人称代名詞との同格表現では，とくに複数主格で弱変化が現れることがある[19]。これは同格表現であり，wir Arm***en*** は「貧しい（arm-）私たち（wir）」ではなく，「私たち（wir），すなわち貧しい者たち（Armen）」という構成である。これは，限定詞と形容詞弱変化の共起が古くは 1 つの名詞句内の修飾表現ではなく，2 つの名詞句間の同格表現に由来する可能性を示唆している。上記のアイスランド語の gaml***i*** Páll/Páll gaml***i***「老パウトル」と同様に，der weis***e*** Nathan「賢い（弱変化 weise←weise-***e***）ナータン（男名）」という「限定詞＋形容詞＋名詞」の語順によるドイツ語の表現も，Nathan der Weis***e***「賢者（der Weis***e***←Weise-***e***）ナータン」（Lessing）という同格表現に由来する可能性がある（Ringe 2006: 170）。第 3 節のゴート語の弱変化による② hlaifs sa liband***a***「生きているパン」（ド *das lebende Brot*）も，「パン（hlaifs），すなわちその生きているもの（sa libanda）」（ド *Brot, das Lebende*）という同格表現の性格を示している。

上記のドイツ語の ihr lieb***en*** Freunde!「君たち，親愛なる友らよ」/ihr Gewaltig***en***!「おんみら強力な者たちよ」は，相手が限定された呼びかけでの弱変化の例である。ドイツ語では，古高ドイツ語期から呼びかけでは形容詞が弱変化を示し，19 世紀でも複数形に弱変化の例がある（ド lieb***en*** Freunde!「親しい友たちよ」(Heine, Dal/Eroms 2014[4]: 70）。ゴート語でも，atta weih***a***「聖なる父よ」（John 17, 11↔強変化 weih***s***「聖なる」），brōþrjus meinai liub***ans***「私の愛する兄弟たちよ」（1 Corinthians 15, 58↔強変化 liub***ai***「親愛な」）のように，呼びかけに用いた形容詞のほとんどが弱変化する（Streitberg 1981: 28）。北ゲルマン語でも，アイスランド語の kær***i*** vinur!/kær***u*** vinir!「親

[19] ドイツ語では，複数以外に女性与格（ド mir arm***en*** Frau「私，貧しい（弱変化 -en↔強変化 -er）女に」↔mir arm***em*** Manne「私，貧しい（強変化 -em）男に」）の同格表現で弱変化が現れる（Dal/Eroms 2014[4]: 70）。

愛なる友/友たちよ」(↔強変化 kæ***r*** (＜*kær-***r***) vinur/kær***ir*** vinir，英 *a dear friend/dear friends*)，kær***a*** Anna!「親愛なるアンナ（女名）よ」(↔強変化 kæ***r*** (＜kær-***Ø***) vinkona，英 *a dear girl friend*) のように，手紙の冒頭などの呼びかけの文句では弱変化（単数主格男性 -i/女・中性 -a/複数主格 -u[20]）を用いる（第 9 節の変化表参照)。男性と女性を両性（英 common gender)[21] に融合させ，形容詞の変化語尾を大幅に簡素化した大陸北ゲルマン語の多くでも，たとえばスウェーデン語の kär***a*** vän!「親愛な友よ」(↔強変化 en kär-***Ø*** vän，英 *a dear friend*) のように，呼びかけでは語尾 -a を伴う弱変化形を用いる（第 10 節の変化表参照)。

さらに別の例には，形容詞の比較級がある。比較級は原則として特定の対象との対比を表すので，ゲルマン語の古語では弱変化しか示さず，今でもアイスランド語の比較級には弱変化しかない（ア kær—比較級・弱変化 kær(a)r***i***[22]—最上級・強変化/弱変化 kær(a)st***ur***/kærast***i***，英 *dear—dearer—dearest*)。

## 5．弱変化名詞と個別化・限定の意味の残存—ドイツ語の男性弱変化名詞

形容詞以外にも弱変化に個別化・限定の意味が残存する例として，ドイツ語の男性弱変化名詞（英 weak masculine）が挙げられる。これは形容詞弱変化と同様に，単数主格以外で一律に語尾 -en（[ən]；-e で終わる語は -n，以下略）を伴う名詞で，Bote「使者」，Löwe「ライオン」，Mensch「人間」など，無生名詞に比べて個別的対象を表す性格の強い人物・動物（とくに獣）を表わす有生名詞が多い。男性弱変化名詞の「有生」（ド belebt/英 animate）へ

[20] 第 8 節で述べるように，北ゲルマン語では語末音 n は脱落した。

[21]「両性」（ス/デ/ブ/ニュ utrum，英 common gender）には「共性，通性，汎性」という訳語もある。

[22] アイスランド語の比較級の弱変化は原級・最上級とは異なって格変化せず，中性単数 kær(a)r***a*** を除いてすべて kær(a)r***i*** となる。

の意味的特殊化は，初期新高ドイツ語（ド Frühneuhochdeutsch 1350〜1650）の時代以降に強まって，現在に至っている[23]。その原点は，ゲルマン祖語の n-語幹の意味にさかのぼると考えられる。

この傾向はドイツ語起源以外の有生男性名詞にも及んでおり，その借用によっても助長された。Köpcke（1995: 167）によれば，まず，18/19 世紀にフランス語から借用したあいまい母音 -e [ə] で終わる人間男性名詞（フラ artiste「俳優」＞ド（古）Artiste [aʀtístə]「（サーカス・寄席の）芸人」など）は，最終音節から 2 番目にアクセント（ド Penultimabetonung）[24] があり，-e [ə] で終わる多音節語だった。そして，この点がドイツ語起源の有生男性弱変化名詞と一致したために，男性弱変化名詞として借用された（ド Geolog***e*** [geoló:gə]「地質学者」，Matros***e*** [matʀó:zə]「水夫」，Chines***e*** [çiné:zə]「中国人」など）。この種の男性弱変化名詞は，ドイツ語起源の例（ド Aff***e*** [áfə]「猿」，Gesell***e*** [gəzɛ́lə]「職人」，Heid***e*** [háɪdə]「異教徒」など）[25] が約 100 語であるのに対して，借用語は約 200 語に及んでいる。語形成手段としても生産性があり，現代ドイツ語の男性弱変化名詞の中で第 1 のプロトタイプを形成している（Köpcke 1995: 161, 171）。

次に，語末音 -e [ə]（ド finales Schwa）の脱落（ド（古）Artist***e*** [aʀtístə]＞Artist [aʀtíst] など）[26] の結果，最終音節にアクセント（ド Ultimabetonung）

---

[23] かつての女・中性弱変化名詞（Herz―属格 Herz***ens***「心臓」を除く）は，単数斜格で -en が脱落し，-en を複数形語尾とする強変化名詞に移行した。これには頻用する複数形との意味的な類推が考えられる（ド女性 Hirse―複数 Hirse***n***「キビ」＜中高ド男性 hirse―属格 hirse***n***，ド女性 Backe―複数 Backe***n***「頬」＜中高ド男性 backe―属格 backe***n***「頬」）。Köpcke（1995: 174）によれば，これによって男性名詞の語末音 -e [ə] が有生名詞の指標としての性格を強めた。なお，Köpcke（1995: 174）は「この過程は無生名詞だけに検証される」（... ist dieser Prozeß nur für unbelebte Nomina nachzuweisen）と述べているが，厳密に言えば当該の例は有生名詞である。

[24] Penultima(-) の通常の正書法は Pänultima である。

[25] Junge―属格 Junge***n(s)***/Jung***s***「男の子」，Untertan―属格 Untertan***s***/（Untertan***en***）「家臣」のように弱変化形と強変化形が併存し，強変化への移行が認められる例もある。

[26] 現代フランス語でも，19 世紀初期のフランス語と違って，artiste のような無アクセントの語末音 -e [ə] は発音されなくなっている。

を持つ語が第 2 のプロトタイプを形成するようになった。これには，有アクセントの借用名詞派生接尾辞 -ist/-ant/-(i)ent による有生/人間男性名詞（ド Poliz***ist*** [politsíst]「警官」，Kommand***ant*** [kɔmandánt]「指揮官」，Stud***ent*** [ʃtʊdɛ́nt]「学生」，Rezip***ient*** [ʀetsipi̯ɛ́nt]「受取人」など）[27] やその他の例（ド Pilot [piló:t]「パイロット」，Poet [poé:t]「詩人」，Ökonom [økonó:m]「経済学者」など）が含まれる。前者の派生名詞は生産性が高く，派生接尾辞 -ist を筆頭として 800 語以上を数える（Köpcke 1995: 175）。

最後に，多音節名詞の両者に対して，1 音節のドイツ語起源の例（ド Mensch「人間」，Bär「熊」，Herr「紳士」など[28]）が約 35 語（人間名詞約 15 語，動物（とくに獣）名詞約 20 語，Köpcke（1995: 161））[29] ある。以上の 3 者がドイツ語の有生男性弱変化名詞のプロトタイプになっている。

一方，無生の意味の男性弱変化名詞は典型的な弱変化からはずれ，単数属格で「弱変化語尾 -n＋強変化語尾 -s」を伴う（ド Glaube—Glaube***ns***「信仰」，Gedanke—Gedanke***ns***「思考」，Name—Name***ns***「名前」，Wille—Wille***ns***「意志」など）。語数は約 10 語（Köpcke 1995: 161）にすぎない。それぞれ Glaube***n***，Gedanke***n***，Name***n***，Wille***n*** のように -n を伴う稀な単数主格形があり，強変化名詞への移行が認められ，語形変化が不安定である。実際，Schaden—Schaden***s***「損害」，Kuchen—Kuchen***s***「ケーキ」，Bogen—Bogen***s***「弓」，Brunnen—Brunnen***s***「泉」などの無生男性名詞は，中高ドイツ語では schade—schade***n***，kuoche—kuoche***n***，boge—boge***n***，brunne—brunne***n*** であり，あいまい母音 -e で終わる弱変化名詞に由来する。現在では -en で終わる語幹を持つこの種の男性名詞は，初期新高ドイツ語期以降，単数属格 -n で強

---

[27] Konson***ant*** [kɔnzonánt]「子音」など，このパターンからはずれた無生名詞もある。

[28] それぞれ中高ドイツ語の mensch***e***, ber***e***, herr***e*** という無アクセント母音 -e で終わる 2 音節の男性弱変化名詞に由来する。なお，現代ドイツ語では，-e [ə] を含まない 1 音節語の男性弱変化名詞に無生名詞は存在しない。ド Stern—Stern***(e)s***＜中高ド sterne—sterne***n***「星」のように，語末音 -e の脱落によって強変化名詞に移行した無生男性弱変化名詞は 20 語以上にのぼる（Köpcke 1995: 174）。

[29] Bauer—属格 Bauer***n***/Bauer***s***「農夫」，Spatz—属格 Spatz***en***/Spatz***es***「スズメ」のように，弱変化形と強変化形が併存し，強変化への移行が認められる例もある。

変化語尾 -s を伴うようになった後に（-n＋-s＞-ns），単数主格にも語尾 -n が類推によって広がり，強変化に移行した。Szczepaniak（2011[2]: 62–63）は，これを「語彙項目＞文法項目」または「文法性の低い項目」＞「文法性の高い項目」という文法化とは反対の「文法性の高い項目＞文法性の低い項目」という方向に変化する「脱文法化」（ド Degrammatikalisierung/英 degrammaticalization）の一例とみなしている。有生男性弱変化名詞の増加は，n- 語幹に内在していた個別化・限定の意味が脱文法化によって，特定の範疇の名詞に顕在化したケースといえよう。

## 6．ドイツ語の形容詞変化と固有名詞の語尾 -s ―階層表示による平行表示の回避とシンタグマ表示

上述のように，ゲルマン祖語は名詞句に定の意味の表現手段を強く求めた結果，これを「形容詞強変化・代名詞変化＞形容詞弱変化＞定冠詞」の順に発達させたが，最終的には，定冠詞の発達に呼応して形容詞変化は強・弱変化ともに定の意味を失った。形容詞強・弱変化は定の表現をめぐって相次いで文法化され，定の意味の衰退とともに変質していった。その変質の過程をドイツ語をもとに検証しよう。

現代ドイツ語の弱変化語尾は -e［ə］/-en［ən］の 2 種類のみで，語尾 -e は男性単数主格と女・中性単数主・対格に限られるので，形態表示への寄与はわずかである。名詞変化は形容詞では衰退しており，名詞自体にも，男性弱変化名詞を除いて，単数男・中性属格 -es（［əs］; または -s，以下略）と複数与格 -en（［ən］; または -n，以下略）にしか体系的には残っていない。代名詞変化を踏襲した限定詞は「限定詞＋形容詞＋名詞」から成る句の主要部を形成するようになり，共起する形容詞は形態表示の必要性を大幅に失うに至った。たとえば，不定代名詞 jed***er***（英 *each, every*），manch***er***（英 *many (a), some*），疑問代名詞 welch***er***（英 *which*）はかならずしも定の意味を表さないが，限定詞として用いると，後続の形容詞は弱変化する（manch では複数は強・弱変化；ド jed***er*** gut***e*** Mann（男性単数主格）/manch***e*** gut***e(n)*** Frauen（女性複数

主格）/welch***e*** gut***en*** Kinder（中性複数主格），英 *every good man/some good women/which good children*）。これは限定の意味を表す本来の弱変化の用法から逸脱しており，強変化語尾の反復による「重複変化」（ド Doppelflexion）を避けて，限定詞だけで 1 回限り形態表示する「単一変化」（ド Monoflexion，*Duden-Grammatik* 2009[4]: 947），または「協同変化」（ド kooperative Flexion, Szczepaniak 2011[2]: 107）に移行したことを示している。本稿では，後述するルクセンブルク語での扱い（Schanen 2004: 169–171, Schanen/Zimmer 2004: 54）にならって，重複変化を「平行表示」（フラ marquage parallèle），単一変化（協同変化）を「階層表示」（フラ marquage hierarchisé）と呼び変える。

古高ドイツ語期以来，ドイツ語では指示代名詞と共起する形容詞が強変化する例も稀ではなく，18 世紀にも類例が残っている（古高ド th***a***z schōn***a***z anuzzi（↔ド d***as*** schön***e*** Antlitz，英 *the beautiful face*），ド dies***er*** tot***er*** Hund（Lessing，18 世紀↔ド dies***er*** tot***e*** Hund，英 *the dead dog*）（以上，Dal/Eroms 2014[4]: 68–69））。しかし，こうした平行表示は徐々に捨象されていった。この傾向は，限定詞の欠如を補って形容詞が形態表示を担うはずの強変化でも，一部で見られる。新高ドイツ語（ド Neuhochdeutsch 1650〜）の初期の 17 世紀までは，無冠詞の場合に形容詞男・中性単数属格は強変化（-es）を示していたが，18 世紀には徐々に弱変化（-en）に移行した（Sahel/Vogel 2013: 47）。今日では，gut***en*** Wein***s***「良いワインの」，nächst***en*** Jahr***es***「翌年の」のように弱変化（-en）を援用し，gut***es*** Wein***s***, nächst***es*** Jahr***es*** という平行表示を回避している。

ただし，形態表示は 1 度はなされるのが好ましい。この意味で，不定の意味の限定詞で見られる一部のゼロ語尾形を形容詞に補充させるのが，初期新高ドイツ語期の後期にあたる 16/17 世紀に発達したいわゆる「混合変化」（英 mixed declension）である。混合変化では，次の変化表に示すように，男性単数主格（-er）と中性単数主・対格（-es）において，語尾を伴わない不定冠詞（ein-***Ø***），否定冠詞（kein-***Ø***，英 *no* + 名詞），所有代名詞（＝所有形容詞・所有冠詞 mein-***Ø***，英 *my*）に後続する形容詞は，形態表示を補って強変化（-er/-es）するが（ein-***Ø*** gut***er*** Mann/ein-***Ø*** gut***es*** Kind，英 *a good man/a good*

*child*），それ以外の場合には，限定詞との平行表示を避けて弱変化（-e/-en）する。つまり，限定詞で表示できない強変化語尾は，後続の形容詞に移動して音声的に実現される。こうして，代名詞変化に由来する強変化は「可動的語形変化」（ド bewegliche Flexion）としての性質を獲得した（Sahel/Vogel 2013: 46）。

| 混合変化 | | ある良い男（男性） | ある良い女（女性） | ある良い子供（中性） |
|---|---|---|---|---|
| 単数 | 主格 | ein-***Ø*** gut***er*** Mann | ein***e*** gut***e*** Frau | ein-***Ø*** gut***es*** Kind |
| | 対格 | ein***en*** gut***en*** Mann | ein***e*** gut***e*** Frau | ein-***Ø*** gut***es*** Kind |
| | 与格 | ein***em*** gut***en*** Mann | ein***er*** gut***en*** Frau | ein***em*** gut***en*** Kind |
| | 属格 | ein***es*** gut***en*** Mann(e)s | ein***er*** gut***en*** Frau | ein***es*** gut***en*** Kind(e)s |
| 否定冠詞 | | kein-（複数形を欠く不定冠詞の代用として示す） | | |
| 複数 | 主格 | kein***e*** gut***en*** Männer | kein***e*** gut***en*** Frauen | kein***e*** gut***en*** Kinder |
| | 対格 | kein***e*** gut***en*** Männer | kein***e*** gut***en*** Frauen | kein***e*** gut***en*** Kinder |
| | 与格 | kein***en*** gut***en*** Männern | kein***en*** gut***en*** Frauen | kein***en*** gut***en*** Kindern |
| | 属格 | kein***er*** gut***en*** Männer | kein***er*** gut***en*** Frauen | kein***er*** gut***en*** Kinder |

混合変化の出現によって，不定冠詞と形容詞での強変化語尾の連続を避けて，形容詞は弱変化するようになった（古高ド ein***emu*** guot***emu*** {man(ne)/kinde} ＞ド ein***em*** gut***en*** {Mann/Kind}，英 *(to/for) a good* {*man/child*}）。不定冠詞と否定冠詞は定の意味とは無縁なので，弱変化の使用は本来の限定の意味とは関係がない。この事実は，形容詞弱変化語尾が名詞句内で限定詞との平行表示を回避する形態表示手段へと，さらに文法化を被ったことを示している。後述する Lass（1990）の用語に従えば，これは文法項目が本来の機能とは別の機能を獲得する変化，すなわち，「外適応」（英 exaptation）の一例と言える。

以上の結果，初期新高ドイツ語期の後期以来，代名詞変化に由来する強変化は限定詞と形容詞に共有され，両者の間で前者を補いながら相補分布的に実現されることになった。限定詞を欠く名詞句の男・中性単数属格では，強

変化は限定詞の語形変化を代行する形容詞と固有名詞を除いて，語尾 -es を伴う名詞との間で名詞を優先しながら相補分布的に実現される（ド gut***en*** {Wein***(e)s***/Bier***(e)s***}，英 *of good* {*wine/bier*}）。一方，弱変化は定・不定の条件とは無関係に，２種類の語尾 -e/-en による形容詞特有の語形変化となった。こうして，ドイツ語では名詞句内の階層表示が発達した。

平行表示の回避と階層表示への移行は，第２節の変化表で挙げた限定詞を欠く「Ø＋形容詞強変化＋名詞」との類推から，男・中性単数属格（-es＞-en）で他の限定詞にも及んでいる。たとえば，manch***er***（英 *many (a)*）では manch***en*** として固定し，welch***er***（英 *which*）でも welch***es***/welch***en*** の両方が可能である。jed***er***（英 *each, every*），dies***er***（英 *this*），所有代名詞（ド mein，英 *my* など），否定冠詞 kein（英 *no* ＋名詞）でも，強変化（-es）と並んで，標準語では認められていないが，最近の半世紀の間に弱変化（-en）が少なからず観察されている。弱変化（-en）で後続の名詞属格形とともに副詞として語彙化し，１語でつづる manch***en***orts***「***ところどころ」（男性名詞 Ort「場所」），jed***en***falls「いずれにせよ」（男性名詞 Fall「場合」），all***en***falls「万一の場合には」のような例もある。

ド　*manch**en*** Löffel***s***　多くのスプーンの（*Duden-Grammatik* 2009[4]: 260）
many–男–単–属–弱　spoon–男–単–属
gleich {*welch**es**/welch**en***} Alter***s***　どの年齢だろうと（ib. 262）
no–matter which–中–単–属–強/弱　age–中–単–属
die Pflicht {*jed**es**/jed**en***} Schülers　各々の生徒の義務（ib. 262）
the obligation every–男–単–属–強/弱　pupil–男–単–属
am Ersten {*dies**es**/dies**en***} Monat***s***　今月の１日目に（ib. 288）
on–the first this–男–単–属–強/弱　month–男–単–属

ただし，形態表示は何らかの形で行う必要がある。そのため，弱変化が名詞に残存した男性弱変化名詞（第５節参照）との連続では，単数属格で上記の限定詞に弱変化（-en）は現れない。男性弱変化名詞は単数主格以外で語尾

-en を示すので，属格表示が不明になるのを嫌うためである。

ド　die Pflicht {*jed**es**/**jed**en***} Student***en***　各々の大学生の義務（ib. 969）
　　the obligation every-男-単-属-強/弱　student-男-単-属-弱

これ以外では，上述のように，形容詞強変化は男・中性単数属格で 18 世紀に強変化（-es）から弱変化（-en）に移行し，現在も類推によって限定詞の多くに拡大している。上例は標準ドイツ語の規範的な『ドゥーデン文法』（*Duden-Grammatik* 2009[4]）からの引用であり，平行表示から階層表示（＝単一変化 Monoflexion, ib. 947）への移行が進行している事実を物語っている。

形容詞強変化との類推から限定詞が男・中性単数属格の形態表示を名詞に譲る傾向は，第 2 節で述べた名詞句（厳密には限定詞句）の主要部としての性格に反しているとも言える（注 6 参照）。一方，固有名詞では逆の現象が見られる。すなわち，修飾句を伴う固有名詞には限定詞がつくが，その場合の固有名詞は属格語尾 -s を欠く。

ド　die Situation *Deutschland**s***　ドイツの状況
　　the situation Germany-中-単-属(-s)
　　↔die Situation ***des*** heutigen *Deutschland-**Ø***　今日のドイツの状況
　　the situation the-中-単-属 today's-形-中-単-属-弱 Germany-中-単-属(-Ø)
　　die Leiden *Werther**s***　ウェルテル（＝ヴェーアター，男名）の悩み
　　the sorrows Werther-男-単-属(-s)
　　↔die Leiden ***des*** jungen *Werther-**Ø***（1787[2]）　若きウェルテルの悩み
　　the sorrows the-男-単-属 young-形-男-単-属-弱 Werther-男-単-属(-s)
　　＜die Leiden d***es*** jungen Werther***s***（1774）
　　the sorrows the-男-単-属 young-形-男-単-属-弱 Werther-男-単-属(-Ø)

最後の例はゲーテの小説の題名だが，1774 年の発表当時は，„Die Leiden des jungen Werther***s***“ のように，男名 Werther は属格語尾 -s を伴っていた。1787 年の第 2 版以降はゼロ語尾に変更され，今日に至っている。このように，固有名詞では，属格の平行表示の回避は普通名詞とは対照的になされる。

月，曜日，時代様式など固有名詞に準じた普通名詞でも，男・中性単数属格語尾 -es を欠く語形が標準語として容認されている[30]。

ド　im Laufe ***des*** {*November**s**/November-**Ø***}　11 月の間に（*Duden-Grammatik* 2009[4]: 202）
in-the course the-男-単-属 November-男-単-属(-s/-Ø)
in den Morgenstunden ***des*** {*Mittwoch**s**/Mittwoch-**Ø***}　水曜日の早朝に（ib. 202）
in the morning-hours the-男-単-属 Wednesday-男-単-属(-s/-Ø)
die Musik ***des*** {*Barock**s**/Barock-**Ø***}　バロック時代の音楽（ib. 202f.）
the music the-中・男-単-属 Baroque-中･男-単-属(-s/-Ø)

固有名詞の属格語尾 -s は，無冠詞で特定の対象を指す場合の親族名称を含めて，Sabine***s*** Haus「ザビーネの家」/Mutter***s*** Kleid「（自分の）母のドレス」（英 *Sabine's house/ mother's dress*）のように，ゼロ語尾であるはずの女性名詞にもつき，名詞修飾以外には普通は用いない（ド wegen {d***es*** Wein***s***/ Sabine-***Ø***/?Sabine***s***}「{そのワイン/ザビーネ} のために」）。語形的にも，普通名詞では可能な -es は許されず，-s に制限されている（ド Karl***s***/*Karl***es***←Karl「カール（男名）」↔Kerl***(e)s***←Kerl「男，奴」; Rom***s***/*Rom***es***←Rom「ローマ（都市名）」↔Dom***(e)s***←Dom「大聖堂」）。ドイツ語の固有名詞の属格は，それに準じた普通名詞を含めて，語形変化（＝屈折）の範疇から離れ，名詞句末前接語（英 phrase-final enclitic）として英語（-'s）などの所有格に近く，名詞に先行する場合には限定詞標識としての前接語に変わっている。これ

[30] 辞書では，月・時代様式名の属格は -(e)s またはゼロ語尾と記載されている。

は，大陸北ゲルマン語の一例として，スウェーデン語の属格の歴史的変遷をもとに，Norde（1997）が実証した脱文法化（Norde 2009: 160-179）と共通する事例と言える。したがって，この場合の -s の脱落は，普通名詞とは別に扱う必要がある。

以上のように，ドイツ語の形容詞強・弱変化がたどった過程は，名詞句内の弱変化語尾の拡大と強変化語尾の 1 回使用につながった。その結果は次のパターンにまとめられる（下線部（＿＿）は主として形態表示を担う要素）。

① 限定詞・有語尾強変化＋形容詞・弱変化＋名詞（ド d***er*** gut***e*** Mann）
② 限定詞・ゼロ語尾＋形容詞・強変化＋名詞（ド ein-***Ø*** gut***er*** Mann）
③ Ø ＋形容詞・強変化＋名詞：属格 -es 以外（ド gut***er*** Wein）
④ Ø ＋形容詞（＞限定詞）・弱変化＋名詞・属格 -es
（ド gut***en*** Wein***(e)s***, manch***en*** Löffel***s***）

ドイツ語に見られる名詞句内の平行表示の回避と階層表示への移行は，性・数・格（とくに性・格）の余剰的な表示の手間を省く「言語経済性の原理」（ド sprachökonomisches Prinzip）から説明されることがある（Sahel/Vogel (2013: 47)など）[31]。しかし，これには問題がある。なぜなら，使用例の大多数を占める上記の①では，階層表示によって強変化と弱変化という異なる語尾の使い分けが必要になり，形態表示の手間はかえって煩雑になったとも言えるからである。以下で確認するように，ドイツ語の混合変化に相当する形容詞変化の存在は，本稿で扱う西ゲルマン語ではペンジルヴェニアドイツ語とスイスドイツ語にとどまる。北ゲルマン語もドイツ語的な階層表示型とは言えず，混合変化は見られない。ドイツ語（＝標準ドイツ語）の発達はけっして一般的なケースではない。

言語経済性の観点からは，弱変化を廃して，限定詞と形容詞が同一の強変

[31] 第 2 節で述べたように，数の表示は名詞の語形に明示されることが多く，性・格に比べて言語経済性の原理に関与する度合いは低いと言える。

化をする平行表示のほうが単純で望ましいとも言える。その傾向を示す例には，後述するように，中期オランダ語，ルクセンブルク語，イディッシュ語がある。さらに言語経済性の観点を推し進めると，平行表示の解消だけが目的ならば，形容詞は一律にゼロ語尾，つまり語形変化しなくなるほうが合理的である。英語はその例であり，後述するように，低地ドイツ語にも有語尾形とゼロ語尾形が併存している。ただし，英語のように，限定用法の形容詞がまったくゼロ語尾になって完全に失われた例は，他のゲルマン語には見られない。

以上，名詞句内の語形変化の組み合わせは，ゼロ語尾または限定詞を欠く場合を除くと，次の 4 パターンにまとめられる。後述の結果を先取りすると，①の階層表示はドイツ語，ペンシルヴェニアドイツ語，スイスドイツ語，②の平行表示は北ゲルマン語，中期オランダ語，ルクセンブルク語，イディッシュ語に見られる。③のゼロ表示には英語と部分的に低地ドイツ語が相当する。カッコ［　］をつけた④は歴史言語学的にあり得ず，⑤は形態表示に適さないパターンであり，ともに実例はない。

① 限定詞（強変化）＋形容詞（弱変化）＋名詞：階層表示
② 限定詞（強変化）＋形容詞（強変化）＋名詞：平行表示
③ 限定詞（ゼロ語尾）＋形容詞（ゼロ語尾）＋名詞：ゼロ表示
［④ 限定詞（弱変化）＋形容詞（強変化）＋名詞：階層表示］
［⑤ 限定詞（弱変化）＋形容詞（弱変化）＋名詞：平行表示］

それでも，形容詞の語尾を全廃したゲルマン語は英語以外に存在しない[32]。圧倒的多数の現代ゲルマン語が形容詞語尾を保っている理由は，形態表示にあまり寄与しないドイツ語の弱変化語尾 -e/-en を筆頭に，形容詞語尾一般が形容詞と名詞をつなぐいわば「テープ」に似た要素として，名詞句のまとま

[32] 1400 年以前の英語は形容詞語尾を保っていた。後述するように，これは性の消失と関係がある。Lass（1990: 88）参照。

りを表示する役割を担っているためと筆者は考える（清水 1985）。橋本（1981: 153, 394）は言語類型論の視点から，屈折語尾の持つこの役割を印欧語以外の母音調和，アクセントの縮約，サンディ（連声）などにも適用される概念として，「シンタグマ・マーキング」（英 syntagma marking）の名称のもとに総括した。本稿ではこれを「シンタグマ表示」と呼び変える。

## 7．ドイツ語の名詞句と枠構造の形成

形容詞語尾が形容詞と名詞をつなぐ名詞句のシンタグマ表示の役割を果たすことは，以下の歴史言語学的事実からもうかがえる。

ドイツ語では，古高ドイツ語期（750〜1050）にはまだ，「形容詞＋名詞」と「名詞＋形容詞」の両方の語順が可能で，限定用法の形容詞は有語尾形（代名詞変化）とゼロ語尾形（名詞変化）の明確な区別なく用いられていた（Schrodt 2004: 22, Dal/Eroms 2014[4]: 66）[33]。しかし，「形容詞＋名詞」の語順（古高ド ein {guot***ēr***/guot-***Ø***} man，英 *a good man*）では，中高ドイツ語期（1050〜1350）にゼロ語尾形が衰退し，新高ドイツ語（1650〜）期になると有語尾形（ド ein gut***er*** Mann）が優勢になった。逆に，「名詞＋形容詞」の語順（古高ド ein man {guot***ēr***/guot-***Ø***}）では，有語尾形が衰退し，ゼロ語尾形が優勢になった（Dal/Eroms 2014[4]: 66–68）。

「名詞＋形容詞」に対する「形容詞＋名詞」の語順は，古高ドイツ語期に成立したとされる定冠詞（第 3 節参照）による「定冠詞＋名詞」の語順が「限定詞＋名詞」として文法化され，これをひな形（ド Modell）として影響を受けて優勢になったと言われている（Himmelmann 1997: 131–134）。そして，「定冠詞＋名詞」と「形容詞＋名詞」の両者が「定冠詞＋形容詞＋名詞」の語順を取って，定冠詞と名詞が形容詞をはさんで分離し，全体で「名詞枠」（ド

[33] ただし，Braune/Reiffenstein（2004[15]: 219）は，単数形ではまったく区別が見られないが，複数形では稀な例外を除いて有語尾形（代名詞変化，古高ド blint***e*** man，英 *blind men*）のみが現れると述べている。

Nominalklammer）として「枠構造形成」（ド Klammerbildung）がなされた（Schrodt 2004: 22–24）。そして，定冠詞に続いて，不定冠詞，所有代名詞，指示代名詞，ゼロ冠詞に拡大され，「限定詞＋形容詞＋名詞」という名詞枠の語順が確立したとされている（Szczepaniak 2011[2]: 105–106）。

名詞枠には，句の形式をなす構造的に複雑な形容詞句・分詞句による修飾句を名詞に前置する「冠飾句」（ド erweitertes pränominales Attribut）[34] が含まれる。下記の例のように，冠飾句はすでに古高ドイツ語期から例証され，とりわけノートカー（Notker ca. 950–1022）の著作に多く使われている（Schrodt 2004: 23）。その後，初期新高ドイツ語期の 16 世紀後半以降，1600 年頃を目安として，使用頻度と複雑度が急増した（Weber 1971: 124–125）[35]。これには，官庁言語（ド Kanzleisprache）の文体や文法家による規範化の努力が影響していると言われている。この時期には，限定用法の形容詞は「形容詞＋名詞」の語順に限って有語尾形を示す傾向がいっそう顕著になった。一方，すでに中高ドイツ語期に少なくなっていた「名詞＋形容詞」の語順では，有語尾形が衰退し，ゼロ語尾形が支配的になった（Ebert et al. 1993: 200–201）。Szczepaniak（2011[2]: 106）は次の現代ドイツ語の例を挙げて，「長期間，名詞に前置された形容詞だけが屈折語尾を保ち続けたことで，名詞句の内的な構造性がさらに高められた」（“Die innere Strukturiertheit der Nominalphrase wurde zusätzlich erhöht, indem langfristig nur pränominale Adjektive flexionsfähig blieben”, ib. 106）と述べている。Schrodt（2004: 23）による古高ドイツ語の例と比較されたい。

古高ド　①　diu［fone in *beregenot**α***］erda（前置修飾・冠飾句：有語尾）
　　the　by them sprinkled–女–単–主–弱 earth

[34] 冠飾句は英語を除く他のゲルマン語でも見られるが，ドイツ語では書き言葉でとくに広範に使用され，ゲルマン語の中で最も複雑で長い冠飾句を備えていると言われている（Nübling et al. 2013[4]: 101）。

[35] Weber（1971: 77–80）は，古高ドイツ語の冠飾句はラテン語の影響であり，古高ドイツ語の構造とは相容れないとしているが，これには Lötscher（1990）による反論がある。

それらによって散水された大地（Schrodt 2004: 23）

② din hant［ufen mih *kelegetiu*］（後置修飾：有語尾）
your hand upon me　laid-女-単-主-強
私の上に置かれたあなたの手（ib. 23）

＞ド ③ der［an Witz und an Vermögen *reiche*］Seneca（前置修飾・冠飾句：有語尾）
the　in wit　and in　ability　rich-男-単-主-弱 Seneca
機知と才覚に富んだセネカ（Szczepaniak 2011[2]: 106）

④ Seneca,［*reich-Ø* an Witz und an Vermögen］（後置修飾：ゼロ語尾）
Seneca　rich-***Ø***　in wit　and in ability
同上（ib. 106）

現代ドイツ語の④「後置修飾（名詞＋形容詞句・分詞句）：ゼロ語尾」の例は，名詞句内部の修飾句よりも非制限用法の関係節に似ており，文（＝節）としての（ドsatzwertig）性格が強い。次例では，形容詞句だけを被修飾名詞から分離して叙述的にも表現できる。これは正規の名詞修飾成分からは逸脱した構文と言える。

ド Kathrin,［vom langen Schwimmen schon ganz blau-***Ø*** im Gesicht］, stellte sich unter die Dusche. (*Duden-Grammatik* 2009[4]: 347)
Kathrin［by-the long swimming already wholly blue in-the face］stood (= placed herself) under the shower
長時間の水泳ですでにまったく顔面蒼白になったカトリーンは（カトリーンは，長時間の水泳でまったく顔面蒼白になって），シャワーの下に立った
Kathrin stellte sich unter die Dusche,［vom langen Schwimmen schon ganz ***blau-Ø*** im Gesicht］.（ib. 347）
カトリーンはシャワーの下に立った，長時間の水泳ですでにまったく

顔が蒼白になって

「限定詞＋形容詞＋名詞」による名詞枠は，①分離動詞（＝不変化詞動詞），助動詞構文，機能動詞構文による「主文枠」（ド Hauptsatzklammer，または「動詞枠」（ド Verbalklammer）），②補文標識と文末の定動詞による「従属文枠」（＝副文枠，ド Nebensatzklammer）の①②を合わせた「文枠」（ド Satzklammer）と並んで，名詞句での「枠構造」（ド Klammerstruktur/Rahmenstruktur）として総括できる。これに加えて，Ronneberger-Sibold（1993[2]: 216–218）は，ドイツ語圏北部から南部に拡大した代名詞的副詞（ド Proniminaladverb; R-代名詞（英 R-pronoun））による前置詞残留（英 preposition stranding）を「副詞枠」（ド Adverbialklammer）と呼んでいる。

左枠　［　中域　］　右枠（＝主文枠）
ド　Er ***ruft*** ［sie jeden Tag］ ***an***.（分離動詞 anrufen「電話する」）
he calls　her every day　不変化詞
彼は彼女に毎日，電話する
Er ***wird*** ［sie jeden Tag］ ***anrufen***.（助動詞 werden「…だろう」）
he will　her every day　不変化詞-call
彼は彼女に毎日，電話するだろう
左枠　［　中域　］　右枠（＝従属文枠）
ド　***dass*** ［er sie jeden Tag］ {***anruft/anrufen wird***}（補文標識 dass「…ということ」）
that　he her every day　不変化詞-calls/不変化詞-call will
彼は彼女に毎日，電話する/電話するだろうということ
左枠　［　中域　］　右枠（＝副詞枠）
ド　***Da*** ［weiß ich nichts］ ***von***.　＜***Davon*** weiß ich nichts.
there　know I　nothing　of　there-of know I　nothing
（前置詞残留「それ（da←dar）について（von）」，davon が標準的）
それについて私は何も知らない

名詞枠と文枠をともに枠構造とみなせば，名詞枠「限定詞＋形容詞句・分詞句（有語尾）＋名詞」の語順での形容詞句・分詞句（有語尾），すなわち冠飾句は，文枠の中域（ド Mittelfeld）に相当する。また，名詞枠「限定詞＋名詞＋形容詞句・分詞句（ゼロ語尾）」の語順での形容詞句・分詞句（ゼロ語尾）は，文枠から「枠越え」（ド Ausklammerung）した後域（ド Nachfeld）にあたる。ドイツ語が種々のレベルで構成素の両端を明示する「境界表示型」（ド grenzmarkierender Typus, Nübling et al.（2013[4]: 105））としての類型論的性格を歴史的に強めていった事実に対して，異論はない。

一方，叙述用法（英 predicative use）では，ドイツ語の形容詞は古高ドイツ語期までは有語尾形（古高ド der man ist blint***ēr***/die man sint blint***e***，英 *the man is blind/the men are blind*）が好まれたが，ゼロ語尾形（古高ド der man ist blint-***Ø***/die man sint blint-***Ø***）も多かった（Braune/Reiffenstein 2004: 219）。しかし，中高ドイツ語期には有語尾形が減少し（Paul 2007[25]: 358），初期新高ドイツ語期の 16 世紀にはゼロ語尾に移行した（Ebert et al. 1993: 202）[36]。現在では，ドイツ語の叙述用法の形容詞は主語に一致せず，ゼロ語尾形に統一されている（ド der Mann ist blind-***Ø***/die Männer sind blind-***Ø***）。これは西ゲルマン語の多くに共通している[37]。ゼロ語尾によって，当該の形容詞が名詞句とは無関係に述語の領域に属することが明示される。このように，「名詞＋形容詞」の語順では，形容詞語尾が名詞句のシンタグマ表示の役割を果たさず，叙述用法でも，シンタグマ表示が関与しない。両者では，語尾の捨象

[36] 第 3 節の変化表に示したように，ゴート語では中性単数主・対格でゼロ語尾の名詞変化 blind-***Ø*** と有語尾の代名詞変化 blind***ata*** が併存しているが，叙述用法での使用は前者のゼロ語尾の名詞変化 blind-***Ø*** に限られる（Krause 1968[3]: 178）。この事実はドイツ語の発達傾向に類似している。

[37] 叙述用法でも形容詞が主語との一致によって語尾（強変化語尾）を伴う数少ない例として，上部ドイツ語最高地アレマン方言（ド Höchstalemmanisch）に属するスイスドイツ語ボスコ・グリン（Bosco Gurin）方言がある（ボ dar Büab ischt fiin***ä***（男性←fiin）/d Sunnu ischt heiss***i***（女性←heiss）/ts Iisä ischt härt***s***（中性←härt），英 *the boy is well behaved/the sun is hot/the iron is hard*, Russ (1990: 386)）。

を阻止する構造的理由が乏しかったと考えられる[38]。

これに対して，第 9，10 節で述べる北ゲルマン語は一律に叙述用法と限定用法で形容詞が有語尾形を保っており，この点では保守的である[39]。たとえばアイスランド語では，þessi bjór er góð***ur***（英 *this beer is good*）の限定用法góð***ur***（英 *good*）は主語 þessi bjór（英 *this beer*）に一致し，限定用法の góð***ur*** bjór（英 *good beer*）と同じく強変化男性単数主格語尾 -ur を伴う。それでも，対応する弱変化語尾（-i）は叙述用法に侵入していない（第 9 節の変化表参照）。これは叙述用法が限定の意味とは無関係に，性質・特徴を表すためと考えられる。筆者の知る限り，形容詞が強変化と弱変化の区別を保つ現代ゲルマン語の中で，主語（および目的語）との一致による叙述用法に弱変化を用いる例は存在しない。

さて，明確な文法的意味を持つ比較変化（比較級・最上級）を除いて，形容詞語尾を全廃した英語は，前述のようにゲルマン語として類例を見ない。英語は「限定詞＋形容詞＋名詞」の連続をどのように構造的に特徴づけているだろうか。これについて，前述の橋本（1981: 160–161）は，英語は音声的実現のレベルでシンタグマのまとまりを補っているという。たとえば，The modal occurs with it．という文は，{ðĭ mŏdal əkə́rz wíð it}→[ðə mŏ́dl # əkə́rz # wíð it]→[ðə mŏ́dl # əkərz wíð it] のように「#」で区切られたまとまりとして音声的に実現され，{ðĭ}→[ðə]，{mŏ́dal}→[mŏ́dl] という母音とアクセントの縮約を通じて「シンタグマのまとまりを，いっそう明確にしている」（ib.

[38] この点で例外的なのは，ユトラント半島最北部を占めるヴェンシュセル（デ Vendsyssel）のデンマーク語方言であり，形容詞は限定用法ではゼロ語尾だが，叙述用法では主語と一致して有語尾になる（ヴェ [e höw' hu's]「（高さが）高い家（中性：ゼロ語尾）」（デ et høj***t*** hus）↔ヴェ [hu'sə æ höw'***t***]「その家は（高さが）高い（中性：語尾 [t]）（デ huset er høj***t***），清水 1995: 66–67）。

[39] 注 38 で述べたデンマーク語ヴェンシュセル方言を除く。なお，付表 1 にあるように，北ゲルマン語の形容詞強変化は古ノルド語期から中性単数主・対格でもゼロ語尾の名詞変化を示さず，有語尾の代名詞変化に統一されている点で，他の古ゲルマン諸語とは異なる（注 47 で述べるように，女性単数主格と中性複数の主・対格のゼロ語尾（-Ø）は，かつての語尾 -u に由来する）。

160–161）という。

別の例を挙げると，強勢のある音節がほぼ等しい時間間隔で現れる強勢拍（英 stress-timed）型の英語では，たとえば John is [a {*Ø/good/very good/very good English*} teacher]. という文において，話者の心理では，John と teacher という強勢要素の間に置かれた修飾成分は，語の数が増えればそれだけ短く発音され，上記のような音韻的な縮約が起こりやすくなる。この現象の背景には，形態的なシンタグマ表示が大幅に失われた事実が指摘できる。限定用法の形容詞語尾を保つドイツ語では，この傾向は顕著ではなく，書き言葉では構造的に複雑な修飾句を名詞に前置する上述の冠飾句が頻出する（例　ド eine [zu den Kindern immer sehr *nett**e***] Frau↔英 a woman [always very *kind* to the children]）。これには，従属節で OV 型の語順を示す類型論的特徴と呼応するように，名詞の直前に隣接する形容詞が名詞句のシンタグマ表示の役割を担うことが関係していると筆者は考える（清水 1985）。

名詞句内で形容詞語尾が担うシンタグマ表示の役割を端的に示す例として，17 世紀半ばのオランダ語からアフリカ南端の地で発達したアフリカーンス語がある。後述するように，オランダ語では，形容詞の語尾 -e とゼロ語尾（-Ø）を名詞の性・数と限定詞の種類（定・不定）に従って使い分ける。ところが，性の区別を失ったアフリカーンス語では，こうした統語論的条件とは無関係に，形容詞自体の形態音韻論的特徴に応じて語尾 -e を付与するようになった。語尾 -e の付加によって，かつての語末音が再生される例があることから（アフ juis—juis***te***↔オ juist—juist***e***，英 *just, correct*），Lass（1990）はこれを形容詞語幹の異形態を保持する手段として，「外適応」（英 exaptation）の 1 例とみなしている。Lass（1990）の論考は進化生物学から援用した外適応という概念をめぐる論争につながったが，本稿ではこのアフリカーンス語の例を名詞句のシンタグマ表示の手段とみなして，後述するように別の説明を施す。以下，そこに至る過程を詳述していこう。

## 8．n の脱落の諸相

すでに検討したドイツ語のほかに，現代ゲルマン諸語では形容詞の強・弱変化はどのように変容しているのだろうか。それを論じるために，弱変化を特徴づける n の脱落について歴史言語学的に概観しておこう。

n は前後の音に同化しやすい子音であり，ゲルマン語では種々の例が見られる。まず，北ゲルマン語では，-nk-＞-kk-（古ノ þǫ***kk***（英 tha***nk***），古ノ dre***kk***a（英 dri***nk***）；-nt-＞-tt（古ノ ve***t***r（＜*ve***tt***r，英 wi***nt***er），古ノ bi***nd***a—ba***tt***（英 bi***nd***—bou***nd***））という完全同化とそれに伴う長子音化が起こった。

n はまた，「先行母音＋n」の鼻母音化とその後の口母音化によって脱落しやすい。古ゲルマン諸語では，同一音節内の「母音＋ n＋h」は鼻母音化と n の脱落に伴う母音の代償延長（長音記号「ˊ」/「¯」で示す）を経て，「長母音＋h」になった（ゲ *þ***anh**t-←*þ***ank**-(i)ja-（英 th***ough***t←thi***nk***）：ゴ þ***āh***ta←þ***agk***jan/古高ド d***āh***ta～th***āh***ta←d***enk***en～th***enk***en/古ザ th***āh***ta←th***enk***ian/古英 þ***ōh***te←þ***enc***an/古ノ þ***á***tta←þ***ekk***ja）[40]。

h に限らず，摩擦音一般の直前で同一音節内の「母音＋n」がこの過程を経た現象は，歴史言語学的に英語やフリジア語群が属する北海ゲルマン語（英 North Sea Germanic）の特徴（ド Ingwäonismen）に数えられる（英 f***i***ve/西フ f***ii***f↔ド f***ün***f，英 ***u***s/西フ ***ú***s↔ド ***un***s/オ ***on***s）[41]。また，スイスドイツ語[42]

---

[40] このときの母音が a の場合に，ゲルマン祖語は「印欧 *ā＞ゲ *ō」という変化で失われた長母音 *ā を部分的に回復したとされている。

[41] 共時的にも，西フリジア語では同一音節内の「母音＋n＋摩擦音」で鼻母音化と n の脱落が起こる（西フ fine [ˈfinə]（英 *to find*）—（do）f***yns***t [fiⁿst]（英 *you find*）—hy fynt [fint]（英 *he finds*））。西フリジア語の方言には標準語的な goes [guəs]（英 *goose*）のほかに，gans [gɔːⁿs]（ド *Gans*，オ *gans*）という長音の鼻母音を含む異形があり，これが口母音に変われば，n は完全に脱落することになる（清水 2006: 18）。この例は，n が先行母音の鼻母音化を経て脱落したことを示唆している。

[42] ここで言う「スイスドイツ語」とは，ドイツ，オーストリア，スイスにそれぞれ特有のドイツ語の標準変種（ド Standardvarietät）ではなく，スイスドイツ語諸方言の総称を

を中心とする上部ドイツ語アレマン方言（ド Alemannisch）でも，「母音＋n＋摩擦音 ch [x]/f/s/sch [ʃ]」の n が脱落し，先行母音が長母音化・二重母音化した（チュ f***öö***f, ***i***s；ベ f***üü***f, ***üü***s（英 f***i***ve, ***u***s））。これは「シュタウプの法則」（ド Staubsches Gesetz）と呼ばれている[43]。さらに北ゲルマン語でも，「母音＋n＋f/r/s」の n は m も含めて脱落した（古ノ ***o***ss（ド ***un***s，英 ***u***s），古ノ þ***ó***rr（ド D***onn***er/英 th***un***der＜古英 þ***un***or））。

n はとりわけ語末音で脱落しやすい。北ゲルマン語では，文献以前の時代に n が広範に語末音脱落（英 apocope）を被った。無アクセント音節または母音で終わる 1 音節の機能語の語末では，先行母音の鼻母音化を経て一律に北ゲルマン語の n は脱落している。機能語では母音の代償延長を伴う（古ノ far***a*** （ド fahr***en***，英 *fare*），古ノ ***á***（英 ***on***），古ノ ***í***（英 ***in***）[44]，Haugen 1982: 61）。

古ゲルマン諸語の形容詞弱変化でも，語末音 n の脱落が観察される。第 3 節の変化表で挙げたゴート語の弱変化単数主格（男性 blind***a***，女性 blind***ō***，中性 blind***ō***）と単数中性対格（blind***ō***）がその例である。現代ドイツ語でも，この場合の弱変化語尾は -n を欠く -e である（ド blind***e***）。その他のゴート語の弱変化では，n が後続音を伴う語形（男性複数対・属格 blind***ans***，blind***anē***）が見られるが，ドイツ語（blind***en***）を始めとして，現代ゲルマン諸語ではかつての n の後続音は脱落し，n に後続音が続く例は存在しない。残された語末音についても，弱変化語尾に限らず脱落した例が種々のゲルマン語に散見される。

n の脱落は，形容詞強・弱変化の区別の消失にも大きな影響を与えた。以下では北ゲルマン語から始めて，西ゲルマン語についても検討していこう。

---

指す。

[43] 『スイス方言辞典』（ド *Schweizerisches Idiotikon* 1881～）の中心的創始者として知られる Friedrich Staub（1826～96）による 1874 年の提唱にちなんだ名称。Christen et al. (Hrsg.) (2011[3]: 254f., 260f.), König（1998[12]: 160）参照。

[44] 古ノルド語では，á, í の「´」はアクセントではなく，チェコ語やハンガリー語のように長音を表す。

## 9．離島北ゲルマン語の形容詞変化―語末音 n の脱落と強・弱変化の保持，フェーロー語の二重限定によるシンタグマ表示

第 10 節と併せて，現代北ゲルマン語の形容詞変化を検討しよう。標準語単位で見ると，今日の北ゲルマン語は類型論的観点から，古語の形態的特徴を広範に残す離島北ゲルマン語（アイスランド語，フェーロー語）と大幅に形態を簡素化した大陸北ゲルマン語（スウェーデン語，デンマーク語，ノルウェー語ブークモール（ブ bokmål），ノルウェー語ニューノシュク（ニュ nynorsk））に大別される[45]。まず，最も保守的なアイスランド語は次表のようになる（góð-（英 *good*），後置定冠詞 -inn/-in/-ið など）[46]。

| 強変化 | | ある良い男（男性） | ある良い女（女性） | ある良い子供（中性） |
|---|---|---|---|---|
| 単数 | 主格 | góð***ur*** maður | góð-***Ø*** kona | go***tt*** barn |
| | | | | （← góð- + ***-t***） |
| | 対格 | góð***an*** mann | góð***a*** konu | go***tt*** barn |
| | | | | （← góð− + ***-t***） |
| | 与格 | góð***um*** manni | góð***ri*** konu | góð***u*** barni |
| | 属格 | góð***s*** manns | góð***rar*** konu | góð***s*** barns |
| 複数 | 主格 | góð***ir*** menn | góð***ar*** konur | góð-***Ø*** börn |
| | 対格 | góð***a*** menn | góð***ar*** konur | góð-***Ø*** börn |
| | 与格 | góð***um*** mönnum | góð***um*** konum | góð***um*** börnum |
| | 属格 | góð***ra*** manna | góð***ra*** kvenna | góð***ra*** barna |

[45] 大陸北ゲルマン語にも，スウェーデン中部のダーラナ地方（ス Dalarna）で用いられるスウェーデン語エルヴダーレン方言（ス älvdalska）のように，きわめて古風な形態を残す保守的な方言はあるが，割愛する。

[46] デンマーク語西ユトラント方言の前置定冠詞とその他の北ゲルマン語に共通の後置定冠詞の分布については，第 3 節参照。

| 弱変化 | | その良い男（男性） | その良い女（女性） | その良い子供（中性） |
|---|---|---|---|---|
| 単数 | 主格 | góð***i*** maður***inn*** | góð***a*** kona***n***<br>（＜kona＋***-in***） | góð***a*** barn***ið*** |
| | 対格 | góð***a*** mann***inn*** | góð***u*** konu***na***<br>（＜konu＋***-ina***） | góð***a*** barn***ið*** |
| | 与格 | góð***a*** manni***num***<br>（＜manni ＋***-inum***） | góð***u*** konu***nni***<br>（＜konu＋***-inni***） | góð***a*** barni***nu***<br>（＜barni ＋***-inu***） |
| | 属格 | góð***a*** manns***ins*** | góð***u*** konu***nnar***<br>（＜konu＋***-innar***） | góð***a*** barns***ins*** |
| 複数 | 主格 | góð***u*** mennir***nir***<br>（←menn＋–ir＋***-inir***） | góð***u*** konur***nar***<br>（＜konur ＋***-inar***） | góð***u*** börn***in*** |
| | 対格 | góð***u*** menni***na***<br>（←menn＋–i＋***-ina***） | góð***u*** konur***nar***<br>（＜konur ＋***-inar***） | góð***u*** börn***in*** |
| | 与格 | góð***u*** mönnu***num***<br>（←mönnum＋***-inum***） | góð***u*** konu***num***<br>（←konum＋***-inum***） | góð***u*** börnu***num***<br>（←börnum＋***-inum***） |
| | 属格 | góð***u*** manna***nna***<br>（＜manna ＋***-inna***） | góð***u*** kvenna***nna***<br>（＜kvenna ＋***-inna***） | góð***u*** barna***nna***<br>（＜barna ＋***-inna***） |

強変化女性単数主格と中性複数主・対格（ア góð-***Ø***）はゼロ語尾だが，歴史的には語尾 -u による変化形である[47]。たとえば，latur「怠惰な」（英 *lazy*）では，u-ウムラウトによる語幹母音 a［a(:)］＞ö［œ(:)］の交替による lat-～löt- の異形態が見られる。強変化の表を追加しておこう。弱変化の追加表示は割

[47] 古ルーン語（英 Old Runic）には語尾 -u を示す例がある。古ノルド語と現代アイスランド語ともに u-ウムラウト（ド u-Umlaut）による a＞古ノ ǫ［ɔ］/ア ö［œ(:)］の交替が起こるのも，このためである（古ノ sp***a***kr/ア sp***a***kur↔古ノ sp***ǫ***k/ア sp***ö***k＜*sp***a***k***u***，英 *wise/tame*）。barn「子供」の複数形 b***ö***rn（＜*b***a***rn***u***）も同様。古英語でも，短語幹 1 音節（英 short-stemmed monosyllable）および接尾辞 -lig/-sum による派生形容詞では，付表 1 に示すように，強変化女性単数主格と中性複数主・対格で語尾 -u が現れる（古英 hwat***u***/hālig***u***←hwæt/hālig，英 *active/holy*; Prokosch 1939: 262，Krahe/Meid 1969[7]: 77–78）。

愛するが，上記の変化表での góðu にはすべて lötu（＜*latu）が対応する。

| 強変化 | | ある怠惰な男（男性） | ある怠惰な女（女性） | ある怠惰な子供（中性） |
|---|---|---|---|---|
| 単数 | 主格 | lat***ur*** maður | l***ö***t-***Ø*** kona | lat***t*** barn |
| | | | （＜*l***a**t**u**） | （←lat-＋-***t***） |
| | 対格 | lat***an*** mann | lat***a*** konu | la***tt*** barn |
| | | | | （←lat-＋-***t***） |
| | 与格 | l***ö***t***um*** manni | lat***ri*** konu | l***ö***t***u*** barni |
| | | （＜*l***a**t**um**） | | （＜*l***a**t**u**） |
| | 属格 | lat***s*** manns | lat***rar*** konu | lat***s*** barns |
| 複数 | 主格 | lat***ir*** menn | lat***ar*** konur | l***ö***t-***Ø*** börn |
| | | | | （＜*l***a**t**u**） |
| | 対格 | lat***a*** menn | lat***ar*** konur | l***ö***t-***Ø*** börn |
| | | | | （＜*l***a**t**u**） |
| | 与格 | l***ö***t***um*** mönnum | l***ö***t***um*** konum | l***ö***t***um*** börnum |
| | | （＜*l***a**t**um**） | （＜*l***a**t**um**） | （＜*l***a**t**um**） |
| | 属格 | lat***ra*** manna | lat***ra*** kvenna | lat***ra*** barna |

アイスランド語の形容詞変化は，古ノルド語（厳密には古西ノルド語（ドAltwestnordisch））と本質的に変わっていない（付表１，２参照）。第３節で挙げたゴート語の変化表と比べると，語尾の摩滅は見られるが，強・弱変化の区別は現代ゲルマン語の中で最も徹底して保たれていると言える。第８節で述べたように，語末音 n は脱落しており，ゲルマン祖語の an-語幹（男・中性）/ōn 語幹（女性）に代わって，弱変化語尾は母音 -i[ɪ]/-a[a]/-u[ʏ] で終わる。

ただし，弱変化については，古ノルド語は古ゲルマン諸語の中で最も語尾の簡素化を被った。第３節の変化表に示したゴート語を始め，古高ドイツ語，古ザクセン語では，弱変化名詞の語尾は形容詞の弱変化語尾と完全に一致する点で，本来の語形変化を保っている。古英語も同様であり，唯一，付表２

に示すように，複数属格では，本来の弱変化語尾 -ena（古英 男・女・中 blind***ena***～ 男 han***ena***/女 tung***ena***/中 heort***ena***←han***a***/tung***e***/heort***e***，ド *Hahn*/英 *tongue*/*heart*）と並んで，強変化（＝代名詞変化）語尾との類推による -ra（古英 男・女・中 blind***ra***～þā***ra***，英 *their*）が併存する点で異なる。一方，古ノルド語の形容詞弱変化語尾は，単数では弱変化名詞語尾と等しいものの，複数では，女・中性の主・対格に由来する blind***u*** が与格 blind***um*** を除いて，すべての変化形に一般化している（古ノ 男・女・中：主 blind***u***/対 blind***u***/与 blind***um***/属 blind***u***↔ 男 han***ar***/han***a***/hǫn***um***/han***a***，女 tung***ur***/tung***ur***/tung***um***/tung***na***，中 hjǫrt***u***/hjǫrt***u***/hjǫrt***um***/hjart***na***←han***i***/tung***a***/hjart***a***，ド *Hahn*/英 *tongue*/*heart*）。さらに現代のアイスランド語は，上記の変化表にあるように，複数与格 blind***um*** を blind***u*** として完全な統一複数（ド Einheitsplural）に移行した（ア 男・女・中：主・対・与・属 blind***u***）。それでも，現代ゲルマン諸語の中で例外的にあいまい母音[ə]を欠くアイスランド語は，母音 -i [ɪ]/-a [a]/-u[ʏ] による弱変化を強変化から明確に区別している[48]。

以下の表に示すように，フェーロー語も弱変化語尾 -i [ɪ]/-a [a]/-u[ʊ] を保っている。しかし，フェーロー語では，一般に無アクセント母音 -i [ɪ]/-u [ʊ] は方言ごとにどちらかに中和される傾向が強く，-i は [ə]，-u は [ø] の発音に近い方言もあり，実際には表記どおりに発音されることは稀である（Barnes/Weyhe 1994: 192–193，Thráinsson et al. 2004: 27）。

用法についても，アイスランド語の形容詞は強・弱変化の区別を最もよく保持している。たとえば，þessi（男性単数主格（以下同様），英 *this*）などの定の意味の指示代名詞と共起すると，形容詞は弱変化し（ア þessi góð***i*** maður，英 *this good man*），不定の意味の不定代名詞（ア hver（英 *each, every*），allur（*all*），nokkur/einhver/einn（*a certain, some*），margur（*many*），

[48] 元来，古ノルド語では，無アクセント音節の母音は /i, a, u/ の 3 種類の短母音に限られていた。ただし，初期の文献には /i/ を〈e〉，/u/ を〈o〉と表記する例が少なくない（古ノ blind***i***～blind***e***, blind***u***～blind***o***，付表 2 参照）。現代アイスランド語では，この〈e〉/〈o〉を i/u に復元して表記し，規則的に -i [ɪ]/-u[ʏ] と発音する。

ýmis（*various*），fár（*(a) few*）など）と共起すると，強変化する（ア nokk***ur*** góð***ur*** maður，英 *a certain good man*）。不定冠詞は未発達だが，ドイツ語と違って平行表示の回避は認められず，不定代名詞と形容詞はともに強変化語尾を示す。

このように，アイスランド語では限定詞の定・不定の意味に応じて形容詞が強・弱変化し，ドイツ語のような混合変化はない。一方，形容詞語尾のシンタグマ表示の役割については，強変化の女性単数主格（ア góð-***Ø*** kona，英 *a good woman*）と中性複数主・対格（ア góð-***Ø*** börn，英 *good children*）が共時的にはゼロ語尾であるように，一貫していない部分がある。

一方，属格の衰退など，やや形態的簡素化が進んだフェーロー語は，強・弱変化の区別を保持している点ではアイスランド語と共通である。一方，アイスランド語と違って不定冠詞が発達しており，その複数形もある。不定冠詞の複数形は現代ゲルマン語として珍しい。フェーロー語の不定冠詞複数形は，skógvar「靴（男性複数）」（←skógvur，英 *shoes*←*shoe*），buksur「ズボン（女性複数）」，hjún「夫婦（中性複数）」のように，「1対，1セット」の意味で複数形で固定した名詞に用いる（フェ ***einir*** skógvar（英 *a pair of shoes*），フェ ***einar*** buksur（英 *a pair of trousers*），フェ ***ein*** fátæk hjún（英 *a poor couple*））[49]。語形変化は次のようになる。属格は形態的にも用法上も制限が強いので，割愛する（góð-[50]（英 *good*），後置定冠詞 -in/-in/-ið など，前置定冠詞 tann/tann/tað など）[51]。

---

[49] たとえば，***einar*** skógvar「1足の靴」にたいして，不定冠詞を欠く skógvar は「何足かの靴」の意味になる（Thráinsson et al. 2004: 91–94）。

[50] ð（góð-/-ið）は古ノルド語に基づいて正書法上，再構された文字で，それ自体としてはけっして発音しない。与格語尾 -um も再構による表記で，［ʊn］と発音する。

[51] フェーロー語の前置定冠詞（無アクセント）は，指示代名詞（有アクセント）と同形の tann/tann/tað（英 *the; that*）が話し言葉では一般的である（Thráinsson et al. 2004: 96）。ただし，書き言葉では，同じく指示代名詞と同形の hin/hin/hitt（英 *the; that, the other*）も好まれる。規範的な文法書である Andreasen/Dahl（1998[2]: 82–84）では，定冠詞に hin/hin/hitt を用い，属格も人為的に復活させて記載している。一方，話し言葉を重視した文法書である Petersen/Adams（2009[2]）では，属格は使用の多い人称代名詞以外は，

| 強変化 | | ある良い男（男性） | ある良い女（女性） | ある良い子供（中性） |
|---|---|---|---|---|
| 単数 | 主格 | ein-***Ø*** góð***ur*** maður | ein-***Ø*** góð-***Ø*** kona | ei***tt*** go***tt*** barn<br>（←ein-/góð-＋***-t***） |
| | 対格 | ein-***Ø*** góð***an*** mann | ein***a*** góð***a*** konu | ei***tt*** go***tt*** barn<br>（←ein-/góð-＋***-t***） |
| | 与格 | ein***um*** góð***um*** manni | ein***(ar)i*** góð***ari*** konu | ein***um*** góð***um*** barni |
| | | ある良い靴（男性） | ある良いズボン（女性） | ある良い夫婦（中性） |
| 複数 | 主格 | ein***ir*** góð***ir*** skógvar | ein***ar*** góð***ar*** buksur | ein***i*** góð-***Ø*** hjún |
| | 対格 | ein***ar*** góð***ar*** skógvar | ein***ar*** góð***ar*** buksur | ein***i*** góð-***Ø*** hjún |
| | 与格 | ein***um*** góð***um*** skógvum | ein***um*** góð***um*** buksum | ein***um*** góð***um*** hjúnum |
| 弱変化 | | その良い男（男性） | その良い女（女性） | その良い子供（中性） |
| 単数 | 主格 | ***tann*** góð***i*** maður***in*** | ***tann*** góð***a*** kona***n***<br>（←kona＋***-in***） | ***tað*** góð***a*** barn***ið*** |
| | 対格 | ***tann*** góð***a*** mann***in*** | ***ta*** góð***u*** konu***na***<br>（←konu＋***-ina***） | ***tað*** góð***a*** barn***ið*** |
| | 与格 | ***tí*** góð***a*** manni***num***<br>（←manni＋***-inum***） | ***teirri/tí*** góð***u*** konu***ni***<br>（←konu＋***-ini***） | ***tí*** góð***a*** barni***num***<br>（←barni＋***-inum***） |
| 複数 | 主格 | ***teir*** góð***u*** mennir***nir***<br>（←menn＋-ir＋***-inir***） | ***tær*** góð***u*** konur***nar***<br>（←konur＋***-inar***） | ***tey*** góð***u*** børn***ini*** |
| | 対格 | ***teir*** góð***u*** mennir***nar***<br>（←menn＋-ir＋***-inar***） | ***tær*** góð***u*** konur***nar***<br>（←konur＋***-inar***） | ***tey*** góð***u*** børn***ini*** |
| | 与格 | ***teimum*** góð***u*** monnu***num***<br>（←monnum＋***-inum***） | ***teimum*** góð***u*** konu***num***<br>（←konum＋***-inum***） | ***teimum*** góð***u*** børnu***num***<br>（←børnum＋***-inum***） |

アイスランド語と同様に，強変化では u-ウムラウトによる語幹母音 a[ɛa:, a]＞ø[ø:, œ]（__*m/*n），a[ɛa:, a]＞o[o:, ɔ]（__m/n）の交替を伴う例があ

---

名詞・後置定冠詞にカッコに入れて示すにとどまり，形容詞やその他の代名詞などでは割愛している。

る。latur（lat-～løt-）「怠惰な」（英 *lazy*），longur（lang-～long-）「長い」（英 *long*）の表を追加しておく[52]。弱変化の追加表示は割愛するが，上記の変化表での góðu にはすべて løtu（＜*latu），longu（＜*langu）が対応する。

| 強変化 | | ある怠惰な男（男性） | ある怠惰な女（女性） | ある怠惰な子供（中性） |
|---|---|---|---|---|
| 単数 | 主格 | ein-***Ø*** lat***ur*** maður | ein-***Ø*** løt-***Ø*** kona<br>（＜*l***a**t**u***） | ei***tt*** lat***t*** barn<br>（←ein-/lat-＋-***t***） |
| | 対格 | ein-***Ø*** lat***an*** mann | ein***a*** lat***a*** konu | ei***tt*** lat***t*** barn<br>（←ein-/lat-＋-***t***） |
| | 与格 | ein***um*** l**ö**t***um*** manni<br>（＜*l***a**t***um***） | ein***(ar)i*** lat***ari*** konu | ein***um*** l**ö**t***um*** barni<br>（＜*l***a**t***um***） |
| | | ある長い靴（男性） | ある長いズボン（女性） | ある怠惰な夫婦（中性） |
| 複数 | 主格 | ein***ir*** lang***ir*** skógvar | ein***ar*** lang***ar*** buksur | ein***i*** løt-***Ø*** hjún<br>（＜*l***a**t***u***） |
| | 対格 | ein***ar*** lang***ar*** skógvar | ein***ar*** lang***ar*** buksur | ein***i*** løt-***Ø*** hjún<br>（＜*l***a**t***u***） |
| | 与格 | ein***um*** l**ø**ng***um*** skógvum<br>（＜*l***a**ng***um***） | ein***um*** long***um*** buksum<br>（＜*l***a**ng***um***） | ein***um*** l**ö**t***um*** hjúnum<br>（＜*l***a**t***um***） |

フェーロー語では，不定冠詞の有無は形容詞の語形に影響を与えず，ドイツ語のような混合変化はない。不定冠詞と形容詞の語尾が重複する場合が多く，アイスランド語と同様に平行表示の回避も認められない。

注意を要するのは，第 10 節で述べるデンマーク語以外の大陸北ゲルマン語と同様に，定の表現では後置定冠詞（フェ -in/-in/-ið など）とともに，指示代名詞と同形の無アクセントの前置定冠詞（フェ tann/tann/tað など）を伴っ

[52] アイスランド語について注 47 でも述べたように，形容詞強変化の女性単数主格および中性複数主・対格（フェ góð-***Ø***）はゼロ語尾だが，歴史的には語尾 -u にさかのぼる変化形である。

て，「前置定冠詞＋形容詞＋名詞-後置定冠詞」という二重限定（英 double determination）を示す点である（フェ barn***ið***↔***tað*** góð***a*** barn***ið***，英 *the child* ↔*the good child-the*）。二重限定では，形容詞語尾に加えて，前置定冠詞と後置定冠詞によって名詞句の初めと終わりがマークされる。これは新たなシンタグマ表示の一例とみなすことができ，特筆すべき現象と言える。

## 10. 大陸北ゲルマン語の形容詞変化―語末音 n の脱落と二重限定によるシンタグマ表示

形態的簡素化が大幅に進行した大陸北ゲルマン語では，人称代名詞を除いて格変化が消失し，スウェーデン語とデンマーク語では男性と女性が両性に融合している。両性と中性の 2 性への簡素化は，後述するオランダ語と西フリジア語とも共通である。一方，第 2 , 6 節で述べたドイツ語では，男性と中性の共通点が際立っている（god-（英 *good*），不定冠詞 en/ett/et/ei，後置定冠詞 -en/-et/-ene/-a，前置定冠詞 d-）。

| 強変化 | | ある良い男 | ある良い女 | ある良い子供 |
|---|---|---|---|---|
| | | 両性 | 両性 | 中性 |
| 単数 | ス | ***en*** god-***Ø*** man | ～ ***en*** god-***Ø*** kvinna | ｜ ***ett*** go***tt*** barn（←god-＋***-t***） |
| | デ | ***en*** god-***Ø*** mand | ～ ***en*** god-***Ø*** kvinde | ｜ ***et*** god***t*** barn |
| | | 男性 | 女性 | 中性 |
| | ブ | ***en*** god-***Ø*** mann | ***ei*** god-***Ø*** kvinne | ***et*** god***t*** barn |
| | ニュ | ***ein*** god-***Ø*** mann | ***ei*** god-***Ø*** kvinne | ***eit*** god***t*** barn |
| 複数 | ス | god***a*** män | god***a*** kvinnor | god***a*** barn |
| | デ | god***e*** mænd | god***e*** kvinder | god***e*** børn |
| | ブ | god***e*** menn | god***e*** kvinner | god***e*** barn |
| | ニュ | god***e*** menn | god***e*** kvinner | god***e*** born |

| 弱変化 | | その良い男 | その良い女 | その良い子供 |
|---|---|---|---|---|
| | | 両性 | 両性 | 中性 |
| 単数 | ス | ***den*** god***a*** mann***en*** | ～ ***den*** god***a*** kvinna***n***（＜kvinna＋***-en***） | ｜ ***det*** god***a*** barn***et*** |
| | デ | ***den*** god***e*** mand-***Ø*** | ～ ***den*** god***e*** kvinde-***Ø*** | ｜ ***det*** god***e*** barn-***Ø*** |
| | | 男性 | 女性 | 中性 |
| | ブ | ***den*** god***e*** mann***en*** | ***den*** god***e*** kvinn***a***（＜kvinne＋***-a***） | ***det*** god***e*** barn***et*** |
| | ニュ | ***den*** god***e*** mann***en*** | ***den*** god***e*** kvinn***a***（＜kvinne＋***-a***） | ***det*** god***e*** barn***et*** |
| 複数 | ス | ***de*** god***a*** männ***en*** | ***de*** god***a*** kvinnor***na*** | ***de*** god***a*** barn***en*** |
| | デ | ***de*** god***e*** mænd-***Ø*** | ***de*** god***e*** kvinder-***Ø*** | ***de*** god***e*** børn-***Ø*** |
| | ブ | ***de*** god***e*** menn***ene*** | ***de*** god***e*** kvinn***ene*** | ***de*** god***e*** barn***a*** |
| | ニュ | ***dei*** god***e*** menn***ene*** | ***dei*** god***e*** kvinn***ene*** | ***dei*** god***e*** born***a*** |

不定冠詞の有無は形容詞の語形に影響を与えず，限定詞を欠いても不定冠詞を伴う場合と同じ変化をするので，ドイツ語のような混合変化はない[53]。

[53] フェーロー語と違って，大陸北ゲルマン語には不定冠詞の複数形がない。その他の不定の意味の限定詞で補っても，形容詞の語形は変わらないので，変化表には示さない。なお，所有代名詞については，北ゲルマン語内部で定・不定の形態表示に差がある。大陸北ゲルマン語では，たとえばノルウェー語ブークモールとニューノシュクは「名詞-後置定冠詞＋所有代名詞」（ブ bilen（←bil＋-en）min，英 *car-the my*）↔「所有代名詞＋名詞」（ブ min bil，英 *my car*）のように，定冠詞の有無が所有代名詞の位置に依存するが，スウェーデン語とデンマーク語は「所有代名詞＋名詞」（ス min bil，英 *my car*）の語順しか許さない。一方，離島北ゲルマン語では，アイスランド語はノルウェー語と同様の「名詞-後置定冠詞＋所有代名詞」（ア bíllinn (←bíll＋-inn) minn，英 *car-the my*）↔「所有代名詞＋名詞」（ア minn bíll，英 *my car*）だが，フェーロー語は「名詞＋所有代名詞」（フェ bilur mín，英 *car my*）↔「所有代名詞＋名詞」（フェ min bilur，英 *my car*）のようにどちらの語順も可能で，ともに定冠詞は現れない（Thráinsson et al.（2004: 97，123）。西ゲルマン語でも，後述するように，オランダ語（「所有代名詞＋形容詞・弱変化＋名詞」）と西フリジア語（「所有代名詞＋形容詞・強変化＋名詞」）の相違のように，所有代

これは，第 9 節で扱った離島北ゲルマン語と同様である。ただし，形容詞の弱変化は，語末母音が弱化して 1 種類の語尾（ス -a[a]，デ/ブ/ニュ -e [ə]）に縮約されている。

強変化はさらに大きな簡素化を被った。格変化が消失して，単数のみで「両性：ゼロ語尾（-Ø）↔中性：-t」の区別となっている。ノルウェー語ニューノシュクとブークモールに保たれている男性（不定冠詞 ein/en）と女性（不定冠詞 ei）の区別は，形容詞の語形変化には反映されない。とくに強変化単数両性（男性・女性）がゼロ語尾である点は，第 9 節で述べたように，古ノルド語（付表 1 参照）がすべての性・数・格で有語尾の代名詞変化形を示していた事実と対照的である。強変化複数に至っては，大陸北ゲルマン語では，性の区別なく弱変化と同形の 1 種類の語尾（ス -a[a]，デ/ブ/ニュ -e [ə]）になっている。強・弱変化の区別は定（定冠詞，指示代名詞など）・不定（不定冠詞，無冠詞，不定代名詞など）の条件に応じて，単数だけで保たれ（強変化 -Ø/-t↔弱変化 -a〜-e），統一複数の発達（強・弱変化 -a〜-e）によって語形変化の半分で失われている。

限定詞と形容詞の語尾は，中性単数不定の不定冠詞 ett/et と形容詞強変化語尾 -t の間で重複しており，平行表示の回避はとくに認められない。中性単数語尾 -t は脱落することがあるが，これは個々の形容詞の語形的特徴によるもので，語形変化のしくみとは関係がない。細部には 4 言語間で相違があるが，ある種の接尾辞（デ -(i)sk，ブ -ig/-lig/-(i)sk，ニュ -ig/-ug/-leg）を伴う派生語で，語末音が -e [ə] を含むある種の母音または子音（-s など）の場合がこれにあたる。後者には，まったく無変化の形容詞も含まれる。

ス　ett stackar***s-Ø*** barn（英 *a poor child*）
デ　et dan***sk-Ø*** barn（英 *a Danish child*），et lill***e-Ø*** barn（英 *a little child*）
ブ　et venn***lig-Ø*** barn（英 *a friendly child*），et glem***sk-Ø*** barn（英 *a forgetful child*）

---

名詞と共起する形容詞の語形には，強・弱変化の間で異同が見られる。

ニュ　et ro***leg-Ø*** barn（英 *a quiet child*），et sl***u-Ø*** barn（英 *a cunning child*）

シンタグマ表示としての形容詞語尾の役割は，両性単数不定がゼロ語尾であるように，一貫していない。ただし，定の表現で形容詞（弱変化形）を伴うと，スウェーデン語とノルウェー語ブークモールおよびニューノシュクでは，第 9 節で述べたフェーロー語と同様に，後置定冠詞に加えて，指示代名詞と同形の無アクセントの前置定冠詞（den/det/de）[54] を併用して，「前置定冠詞＋形容詞＋名詞–後置定冠詞」という二重限定を示す（ス/ブ・ニュ barn***et***↔***det*** {god***a***/god***e***} barn***et***，英 *the child*↔*the good child-the* など）[55]。これはフェーロー語と同じく，新たなシンタグマ表示の例と言える。一方，西ゲルマン語と南部で隣接するデンマーク語では，英語やドイツ語などの西ゲルマン諸語と同様に「前置定冠詞＋形容詞＋名詞」（デ barn***et***↔***det*** god***e*** barn-***Ø***，英 *the child*↔*the good child* など）となり，二重限定は生じない。

第 3 節から 5 節にかけて，ゴート語とドイツ語の例をもとに，ゲルマン語は祖語の時代以降，「形容詞強変化・代名詞変化＞形容詞弱変化＞定冠詞」の順に，名詞句に定の形態表示を求め続けた事実を確認した。フェーロー語，それにスカンジナヴィア南部のデンマーク語を除くスカンジナヴィア北部の大陸北ゲルマン語に見られる二重限定は，ゲルマン語における一連の限定表現の発達サイクル（ド Definitheitszyklus）の中に位置づけられる可能性がある。

**＊付表 1 ：古ゲルマン諸語の形容詞強変化**

下線部（<u>　　</u>）は代名詞変化，その他は名詞変化。Bammesberger（1990:

[54] 前置定冠詞（den/det/de，英 *the*）と同形の指示代名詞（den/det/de，英 *that, those*）は有アクセントである。

[55] たとえば，ス ***Ø*** Gamla Sta***n***「旧市街」（sta***n***←stad***en***，英 *old city-the*），***Ø*** fransk***a*** revolution***en***「フランス革命」（英 *French Revolution-the*），***Ø*** svenska språk***et***「スウェーデン語」（英 *Swedish language-the*）のように，固有名詞とそれに準じた表現では前置定冠詞の欠如が見られる。

218–219），Krahe/Meid（1969[7]: 77–78），Prokosch（1939: 262），Braune/Heidermanns（2004[20]: 114–117），Nedoma（2010[3]: 63–67），Campbell（1959: 262–267），Hogg/Fulk（2011: 154–155），Braune/Reiffenstein（2004[15]: 220–223），Braune/Ebbinghaus（1970[13]: 42–45），Gallée（1993[3]: 220–224），Rauh（1992: 199–201）をもとに作成。異形態がある場合には代表的な語形を示す。古ノルド語の無アクセント音節の母音 i～e，u～o は i，u と表記する（古ノ -um（～-om），-ri（～-re），-u（～-o），-ir（～-er））。blind-/blint-（英 *blind*），古ノ spakr（英 *wise*），古英 hwæt-（閉音節）/hwat-（開音節）（英 *active*）。

| | | ゴート語 | 古ノルド語 | 古英語 | 古ザクセン語 | 古高ドイツ語 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 単数： | | | | | | |
| 男性 | 主格 | blind***s*** | blind***r***/spak***r*** | blind-***Ø***/hwæt-***Ø*** | blind-***Ø*** | blint***(ēr)*** |
| | 対格 | blind***ana*** | blind***an***/spak***an*** | blind***ne***/hwæt***ne*** | blind***an*** | blint***an*** |
| | 与格 | blind***amma*** | blind***um***/spǫk***um*** | blind***um***/hwat***um*** | blind***um*** | blint***emu*** |
| | 属格 | blind***is*** | blind***s***/spak***s*** | blind***es***/hwat***es*** | blind***es*** | blint***es*** |
| | 具格 | なし | なし | blind***e***/hwat***e*** | blind***u*** | blint***u***, ***-o*** |
| 女性 | 主格 | blind***a*** | blind-***Ø***/spǫk-***Ø*** | blind-***Ø***/hwat***u*** | blind-***Ø*** | blint***(iu)*** |
| | 対格 | blind***a*** | blind***a***/spak***a*** | blind***e***/hwat***e*** | blind***a*** | blint***a*** |
| | 与格 | blind***ai*** | blind***ri***/spak***ri*** | blind***re***/hwæt***re*** | blind***eru*** | blint***eru*** |
| | | | | | ***-aro*** | |
| | 属格 | blind***aizōs*** | blind***rar***/spak***rar*** | blind***re***/hwæt***re*** | blind***era*** | blint***era*** |
| | | | | | ***-ara*** | |
| 中性 | 主格 | blind（***ata***） | blin***t***/spak***t*** | blind-***Ø***/hwæt-***Ø*** | blind-***Ø*** | blint***(az)*** |
| | 対格 | blind（***ata***） | blin***t***/spak***t*** | blind-***Ø***/hwæt-***Ø*** | blind-***Ø*** | blint***(az)*** |
| | 与格 | blind***amma*** | blind***u***/spǫk***u*** | blind***um***/hwat***um*** | blind***um*** | blint***emu*** |
| | 属格 | blind***is*** | blind***s***/spak***s*** | blind***es***/hwat***es*** | blind***es*** | blint***es*** |
| | 具格 | なし | なし | blind***e***/hwat***e*** | blind***u*** | blint***u***, ***-o*** |

複数：

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 男性 | 主格 | blind***ai*** | blind***ir***/spak***ir*** | blind***e***/hwat***e*** | blind***e***, ***-a*** | blint***e*** |
| | 対格 | blind***ans*** | blind***a***/spak***a*** | blind***e***/hwat***e*** | blind***e***, ***-a*** | blint***e*** |
| | 与格 | blind***aim*** | blind***um***/spǫk***um*** | blind***um***/hwat***um*** | blind***um*** ***-un*** | blint***ēm*** |
| | 属格 | blind***aizē*** | blind***ra***/spak***ra*** | blind***ra***/hwæt***ra*** | blind***aro*** | blint***ero*** |
| 女性 | 主格 | blind***ōs*** | blind***ar***/spak***ar*** | blind***a***/hwat***a*** blind***e***/hwat***e*** | blind***a*** | blint***o*** |
| | 対格 | blind***ōs*** | blind***ar***/spak***ar*** | blind***a***/hwat***a*** blind***e***/hwat***e*** | blind***a*** | blint***o*** |
| | 与格 | blind***aim*** | blind***um***/spǫk***um*** | blind***um***/hwat***um*** | blind***um*** ***-un*** | blint***ēm*** |
| | 属格 | blind***aizō*** | blind***ra***/spak***ra*** | blind***ra***/hwæt***ra*** | blind***aro*** | blint***ero*** |
| 中性 | 主格 | blind***a*** | blind-***Ø***/spǫk-***Ø*** | blind-***Ø***/hwat***u*** | blind-***Ø*** | blint***iu*** |
| | 対格 | blind***a*** | blind-***Ø***/spǫk-***Ø*** | blind-***Ø***/hwat***u*** | blind-***Ø*** | blint***iu*** |
| | 与格 | blind***aim*** | blind***um***/spǫk***um*** | blind***um***/hwat***um*** | blind***um*** ***-un*** | blint***ēm*** |
| | 属格 | blind***aizē*** | blind***ra***/spak***ra*** | blind***ra***/hwæt***ra*** | bllind***aro*** | blint***ero*** |

＊付表２：古ゲルマン諸語の形容詞弱変化

Bammesberger（1990: 163–165, 229–230），Krahe/Meid（1969[7]: 45–49），Prokosch（1939: 262），Braune/Reiffenstein（2004[15]: 226–227），Nedoma（2010[3]: 68–70），Campbell（1959: 272），Hogg/Fulk（2011: 172–174），Braune/Heidermanns（2004[20]: 121–122），Braune/Ebbinghaus（1970[13]: 38–39, 45），Gallée（1993[3]: 228–229），Rauh（1992: 201–203）をもとに作成。異形態がある場合には代表的な語形を示す。古ノルド語の無アクセント音節の母音 i〜e，u〜o は i，u と表記する（-i（〜-e), -u（〜-o), -um（〜-om））。

ゲルマン語形容詞変化の歴史的発達（1）

| | | ゴート語 | 古ノルド語 | 古英語 | 古ザクセン語 | 古高ドイツ語 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 単数： | | | | | | |
| 男性 | 主格 | blind***a*** | blind***i***/spak***i*** | blind***a***/hwat***a*** | blind***o*** | blint***o*** |
| | 対格 | blind***an*** | blind***a***/spak***a*** | blind***an***/hwat***an*** | blind***on*** | blint***on*** |
| | 与格 | blind***in*** | blind***a***/spak***a*** | blind***an***/hwat***an*** | blind***on*** | blint***en*** |
| | 属格 | blind***ins*** | blind***a***/spak***a*** | blind***an***/hwat***an*** | blind***on*** | blint***en*** |
| 女性 | 主格 | blind***ō*** | blind***a***/spak***a*** | blind***e***/hwat***e*** | blind***a*** | blint***a*** |
| | 対格 | blind***ōn*** | blind***u***/spǫk***u*** | blind***an***/hwat***an*** | blind***un*** | blint***ūn*** |
| | 与格 | blind***ōn*** | blind***u***/spǫk***u*** | blind***an***/hwat***an*** | blind***un*** | blint***ūn*** |
| | 属格 | blind***ōns*** | blind***u***/spǫk***u*** | blind***an***/hwat***an*** | blind***un*** | blint***ūn*** |
| 中性 | 主格 | blind***ō*** | blind***a***/spak***a*** | blind***e***/hwat***e*** | blind***a*** | blint***a*** |
| | 対格 | blind***ō*** | blind***a***/spak***a*** | blind***e***/hwat***e*** | blind***a*** | blint***a*** |
| | 与格 | blind***in*** | blind***a***/spak***a*** | blind***an***/hwat***an*** | blind***on*** | blint***en*** |
| | 属格 | blind***ins*** | blind***a***/spak***a*** | blind***an***/hwat***an*** | blind***on*** | blint***en*** |
| 複数： | | | | | | |
| 男性 | 主格 | blind***ans*** | blind***u***/spǫk***u*** | blind***an***/hwat***an*** | blind***on*** | blint***on*** |
| | 対格 | blind***ans*** | blind***u***/spǫk***u*** | blind***an***/hwat***an*** | blind***on*** | blint***on*** |
| | 与格 | blind***am*** | blind***um***/spǫk***um*** | blind***um***/hwat***um*** | blind***on*** | blint***ōm*** |
| | 属格 | blind***anē*** | blind***u***/spǫk***u*** | blind***ra***/hwæt***ra***<br>blind***ena***/hwat***ena*** | blind***ono*** | blint***ōno*** |
| 女性 | 主格 | blind***ōns*** | blind***u***/spǫk***u*** | blind***an***/hwat***an*** | blind***un*** | blint***ūn*** |
| | 対格 | blind***ōns*** | blind***u***/spǫk***u*** | blind***an***/hwat***an*** | blind***un*** | blint***ūn*** |
| | 与格 | blind***ōm*** | blind***um***/spǫk***um*** | blind***um***/hwat***um*** | blind***on*** | blint***ōm*** |
| | 属格 | blind***ōnō*** | blind***u***/spǫk***u*** | blind***ra***/hwæt***ra***<br>blind***ena***/hwat***ena*** | blind***ono*** | blint***ōno*** |
| 中性 | 主格 | blindō***na*** | blind***u***/spǫk***u*** | blind***an***/hwat***an*** | blind***un*** | blint***un*** |
| | 対格 | blind***ōna*** | blind***u***/spǫk***u*** | blind***an***/hwat***an*** | blind***un*** | blint***un*** |
| | 与格 | blind***am*** | blind***um***/spǫk***um*** | blind***um***/hwat***um*** | blind***on*** | blint***ōm*** |

属格　blind***anē***　blind***u***/spǫk***u***　blind***ra***/hwæt***ra***　bllind***ono***　blint***ōno***
blind***ena***/hwat***ena***

## 参考文献


Andreasen, Paulivar/Dahl, Árni. 1998[2] (1997). *Mállæra*. Tórshavn: Føroya Skúlabókagrunnur.

Bammesberger, Alfred. 1990. *Die Morphologie des urgermanischen Nomens*. Heidelberg: Winter.

Barnes, Michael P./Weyhe, Eivind. 1990. Faroese. In: König, Ekkehard/Van der Auwera, Johan (eds.). 1994. *The Germanic Languages*. London/New York: Routledge. 190–218.

Braune, Wilhelm/Ebbinghaus, Ernst A. 1970[13] (1891). *Abriß der althochdeutschen Grammatik*. Tübingen: Niemeyer.

Braune, Wilhelm/Heidermanns, Frank. 2004[20] (1880). *Gotische Grammatik*. Tübingen: Niemeyer.

Braune, Wilhelm/Reiffenstein, Ingo. 2004[15] (1886). *Althochdeutsche Grammatik I. Laut- und Formenlehre*. Tübingen: Niemeyer.

千種眞一　1983「ゲルマン語形容詞の強弱変化について」『東北ドイツ文学研究』27: 52–68

Campbell, Alistair. 1959. *Old English Grammar*. Oxford: Oxford University Press.

Christen, Helen/Glaser, Elvira/Friedli, Matthias (Hrsg.). 2011[3] (2010). *Kleiner Sprachatlas der deutschen Schweiz*. Frauenfeld/Stuttgart/Wien: Hueber.

Comrie, Bernard. 1998. The Indo-European Linguistic Family: Genetic and Typological Perspectives. In: Ramat, Anna Giacalone/Ramat, Paolo (eds.). *The Indo-European Languages*. London/New York: Routledge. 74–97.

Dal, Ingerid/Eroms, Hans Werner. 2014[4] (1952). *Kurze deutsche Syntax auf historischer Grundlage*. Berlin/Boston: De Gruyter.

*Duden-Grammatik* (=Dudenredaktion (Hrsg.) *Duden. Die Grammatik*). 2009[4]. Mannheim/Wien/Zürich: Dudenverlag.

Ebert, Robert Peter/Reichmann, Oskar/Solms, Hans-Joachim/Wegera, Klaus-Peter. 1993. *Frühneuhochdeutsche Grammatik*. Tübingen: Niemeyer.

Gallée, Johan Hendrik. 1993[3] (1891). *Altsächsische Grammatik*. Tübingen: Niemeyer.

Greenberg, Joseph H. 1963. Some Universals of Grammar with Particular Reference to the Order of Meaningful Elements. In: Greenberg, Joseph H. (ed.). *Universals of Language*. Cambridge, MA: The MIT Press. 73–113.

橋本萬太郎　1981『現代博言学』東京：大修館書店

Harðarson, Jón Axel. 2017. The Morphology of Germanic. In: Klein, Jared/Joseph, Brian/Fritz, Matthias (eds.). *Handbook of Comparative and Historical Indo-European Linguistics* (HSK Bd. 41.2). Berlin/Boston: De Gruyter Mouton. 913–954.

Haugen, Einar. 1982. *Scandinavian Language Structures: A Comparative Historical Survey*. Tübingen: Niemeyer.

Hill, Eugen. 2013. *Einführung in die historische Sprachwissenschaft des Deutschen*. Darmstadt: WBG (Wissenschaftliche Buchgesellschaft).

Himmelmann, Nikolaus P. 1997. *Deiktikon, Artikel, Nominalphrase. Zur Emergenz syntaktischer Struktur*. Tübingen: Niemeyer.

Hogg, Richard M./Fulk, R. D. 2011. *A Grammar of Old English. Vol. 2. Morphology*. Wiley-Blackwell: Chichester.

Jasanoff, Ray. 1994. Germanic (Le germanique). In: Bader, Françoise (ed.) *Langues indo-européennes*. Paris: CNRS Editions. 251–280.

König, Werner. 1998[12] (1978). *dtv-Atlas deutsche Sprache*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag.

Köpcke, Klaus-Michael. 1995. Die Klassifikation der schwachen Maskulina in der deutschen Gegenwartssprache. Ein Beispiel für die Leistungsfähigkeit der Prototypentheorie. *Zeitschrift für Sprachwissenschaft* 14–2. 159–180.

Krahe, Hans/Meid, Wolfgang. 1969[7] (1942). *Germanische Sprachwissenschaft II. Formenlehre*. Berlin: De Gruyter.

Krause, Wolfgang. 1968[3] (1953). *Handbuch des Gotischen*. München: Beck.

Kress, Bruno. 1982. *Isländische Grammatik*. München: Hueber.

Lass, Roger. 1990. How to Do Things with Junk: Exaptation in Language Evolution. *Journal of Linguistics* 26: 79–102.

Leiss, Elisabeth. 2000. *Artikel und Aspekt. Die grammatischen Muster von Definitheit*. Berlin/New York: De Gruyter.

Lötscher, Andreas. 1995. Variation und Grammatisierung in der Geschichte des erweiterten Adjektiv- und Partizipialattributs des Deutschen. In: Betten, Anne (Hrsg.) *Neuere Forschungen zur historischen Syntax des Deutschen. Referate der Internationalen Fachkonferenz Eichstätt 1989*. Tübingen: Niemeyer.

Meillet, Antoine. 1949[7] (1917). *Caractères généraux des langues germaniques*. Paris: Librairie Hachette.

Nedoma, Robert. 2010[3] (2001). *Kleine Grammatik des Altisländischen*. Heidelberg: Winter.

Nichols, Johanna. 1986. Head-marking and Dependent-marking Grammar. *Language* 62. 56–119.

Norde, Muriel. 1997. *The History of the Genitive in Swedish. A Case Study of Degrammaticalization*. Amsterdam: Vakgroep Scandinavische taal- en letterkunde. Universiteit van Amsterdam.

Norde, Muriel 2009. *Degrammaticalization*. Oxford: Oxford University Press.

Nübling, Damaris/Dammel, Antje/Duke, Janet/Szczepaniak, Renata 2013[4] (2006). *Historische Sprachwissenschaft des Deutschen*. Tübingen: Narr Francke Attempto.

Paul, Hermann (Klein, Thomas/Solms, Hans-Joachim/Wegera, Klaus-Peter/Prell, Heinz-Peter). 2004[25] (1881). *Mittelhochdeutsche Grammatik*. Tübingen: Niemeyer.

Petersen, Hjalmar P./Adams, Jonathan. 2009[2]. *Faroese. A Language Course for Beginners. Grammar*. Tórshavn: Stiðin.

Prokosch, Eduard. 1939. *A Comparative Germanic Grammar*. Philadelphia: Linguistic Society of America.

Ramat, Paolo. 1981. *Einführung in das Germanische*. Tübingen: Niemeyer.

Rauh, Irmengard. 1992. *The Old Saxon Language. Grammar, Epic, Narrative, Linguistic Interference*. New York et al.: Lang.

Ringe, Don. 2006. *From Proto-Indo-European to Proto-Germanic*. Oxford: Oxford University Press.

Ronneberger-Sibold, Elke. 1993[2] (1991). Funktionale Betrachtungen zu Diskontinuität und Klammerbildung im Deutschen. In: Boretzky, Norbert/Enninger, Werner/Jeßing, Benedikt/Stolz, Thomas (Hrsg.). *Sprachwandel und seine Prinzipien*. Bochum: Brockmeyer. 206–236.

Russ, Charles V. J. 1990. High Alemannic. In: Russ, Charles V. J. (ed.). 1990. *The Dialects of Modern German*. London: Routledge. 364–393.

Sahel, Said/Vogel, Ralf. 2013. *Einführung in die Morphologie des Deutschen*. Darmstadt: WBG (Wissenschaftliche Buchgesellschaft).

Schanen, François. 2004. *Parlons luxembourgeois*. Paris: L'Harmattan.

Schanen, François/Zimmer, Jacqui. 2004/2006. *1, 2, 3 Lëtzebuergesch Grammaire. 2/3. Le groupe nominal/L'orthographe*. Esch-sur-Alzette: Eidtions Schortgen.

Schrodt, Richard. 2004. *Althochdeutsche Grammatik II. Syntax*. Tübingen: Niemeyer.

清水　誠　1985「文法性とシンタグマ表示 ── ゲルマン語の歴史と類型」『東京大学教養学部外国語科研究紀要』33-1. 23-95.

清水　誠（訳）　1995「K. リングゴー：デンマーク語方言概説」『ノルデン』32. 31-105.

清水　誠　2006『西フリジア語文法―現代北海ゲルマン語の体系的構造記述』北海道大学出版会.

清水　誠　2012a「ゲルマン語の歴史と構造(4) ── 古ゲルマン諸語(2)」『北海道大学文学研究科紀要』136. 53-101.

清水　誠　2012b『ゲルマン語入門』三省堂.
清水　誠　2012c「ゲルマン語形容詞強・弱変化の非文法化」『歴史言語学』（日本歴史言語学会）136. 53–101.
清水　誠　2013「語順の変遷 ── ゲルマン語類型論の視点から」新田春夫/高田博行（編）『講座ドイツ言語学 第2巻 ドイツ語の歴史論』ひつじ書房. 37–64.
Streitberg, Wilhelm. 1981(1920[6]). *Gotische Syntax*. Heidelberg: Winter.
Szczepaniak, Renata. 2011[2] (2009). *Grammatikalisierung im Deutschen*. Tübingen: Narr Francke Attempto.
Thráinsson, Höskuldur/Petersen, Hjalmar P./Jacobsen, Jógvan í Lon/Hansen, Zakaris Svabo. 2004. *Faroese. An Overview and Reference Grammar*. Tórshavn: Føroya Fróðskaparfelag.
Weber, Heinrich. 1971. *Das erweiterte Adjektiv- und Partizipialattribut im Deutschen*. München: Hueber.

＊本研究は科研費（26370471）の助成によるものである。

＊以下に拙稿（2012c）の誤植を記す。
p. 39　タイトル（その他の箇所も同様）：非文法化＞脱文法化
p. 39　key words：非文法＞脱文法化
p. 43　②のグロス：come-PP＞come-PAST.PART,
p. 44　下から7行目：不定冠詞を欠きながら＞削除
p. 45　上から11行目：「ō-語幹」（女性）＞「ō-語幹」
p. 52　（18）上から2/3行目：[fīnst]＞[fīst], [gɔ̄:ns]＞[gɔ̄:s]
p. 53　上から8行目：-(i)nn/-(i)n/-ið ＞-(i)nn/-(i)n/-(i)ð
p. 53　弱変化の変化表：góð***u*** kvenanna ＞ góð***u*** kvennanna
p. 54　強変化の変化表：ニュ en god mann＞ニュ ein god mann
p. 56〜58　変化表および例文：gutt***e***＞gudd***e***, gutt***en***＞gudd***en***, gutt***er***＞gudd***er***
p. 56　変化表：dat gut***t*** Kand（e***n*** + Eifel）＞dat gut***t*** Kand
p. 58　③…女性単数与格＞…女性単数与・属格
p. 59　1行目：無語尾として統一語形変化を示している＞無語尾であり，定と不定の間で形容詞の語形に区別がない
p. 59　上から6行目：ド{Ø/die} gut***en***＞ド{Ø gut***e***/die gut***en***}
p. 59　上から14行目：二重形態表示を助長＞強変化による二重形態表示を助長
p. 61　下から3行目：「nの削除」は＞「nの削除」の復元は
p. 65　下から3行目：中世以来＞17世紀以来
p. 67　下から15行目：語中脱落＞語中音脱落

p. 68　上から 10 行目：/ng [ŋ]＞削除
p. 68　上から 14 行目：streng（オ streng，英 strict）＞削除
p. 68　注（46）最終行：多数派の-en＞多数派の -e
p. 70　追加：Nichols, Johanna 1986. Head-marking and Dependent-marking Grammar. *Language* 62. 56-119.
p. 70　Schanen, François/Zimmer, Jaqui＞Schanen, François/Zimmer, Jacqui